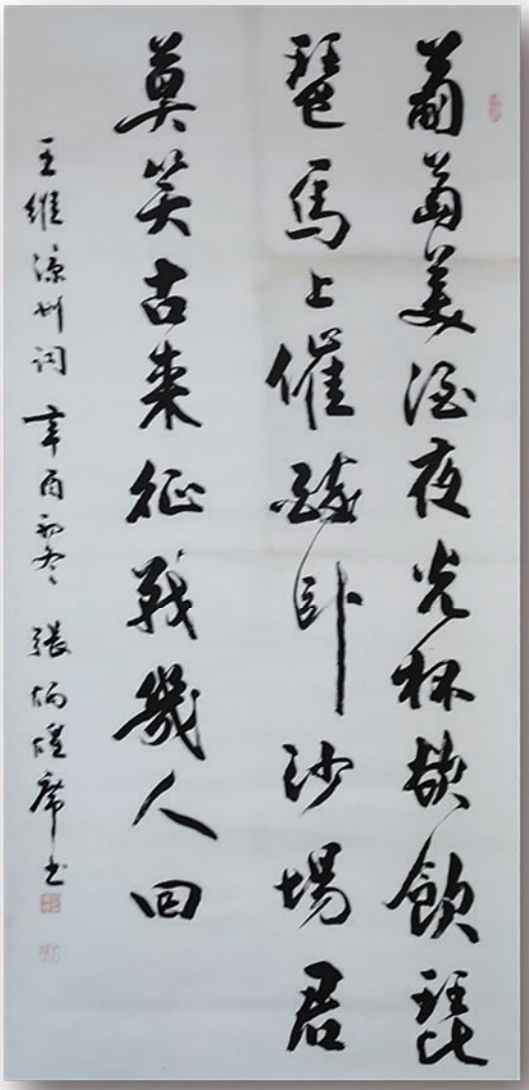
河正雄コレクション　資料集　第２号

川 田　泰 代



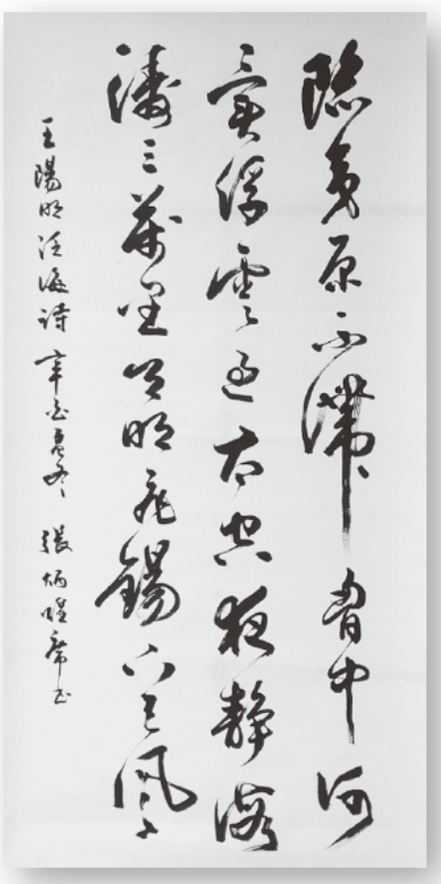
2021 年 3 月

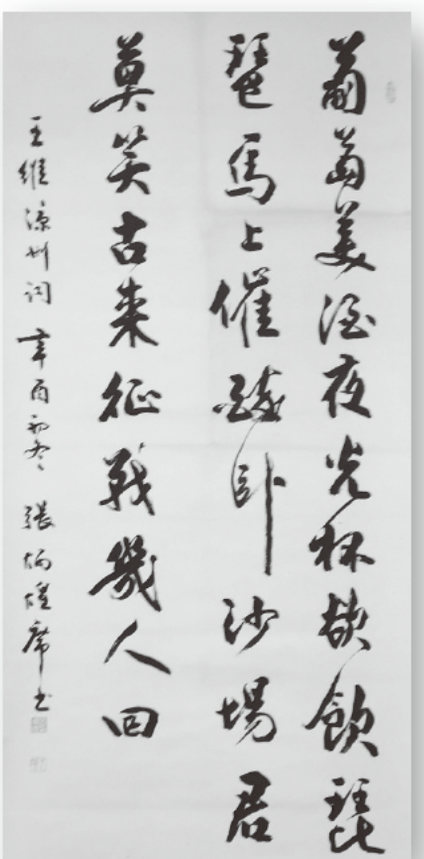
良心の囚人とは？

Conscientious　Prisoner の訳語で、思想、信条、言論、表現の自由を問われて、追放、逮捕、拘禁、投獄されていて、「世界人権宣言」にのっとって救出されなければならない人たちのことを指す。この言葉を心に刻んでおこう。　　川田泰代

河正雄コレクション　資料集　第２号

川田　泰代





発行にあたって

「河正雄コレクション」の一つである「涼州詞」と「泛海詩」は、台湾で著名な書道家張炳煌氏の作品。台湾人青年陳玉璽の救援活動に多大な貢献をした川田泰代に贈られた。

川田泰代はジャーナリストで平和活動家。正義感が人一倍強い行動派で、平和と国際親善、人権擁護のために生涯を貫き通した。張炳煌氏から川田泰代に贈られた詳しい経緯は不明だが、「良心の囚人」として捕らえられた陳玉璽の救出に多大な貢献をした川田泰代に対する敬意と感謝が込められた作品だと考えられる。「涼州詞」は反戦の思いが込められた初唐七言絶句の傑作の一つ。「泛海詩」では泰然と生きた川田泰代の生涯を表現しているのだろうか。

２幅の席書が「河正雄コレクション」になるまでの経過が興味深い。晩年の川田泰代は体調を崩し、経済的にも苦しかった。複数の知人に貸した多額のお金の返済が滞った影響で、自らのアパート代も支払えないほどの困窮を極めた。その時に川田泰代を支え続けたのが社会運動家の福田政夫氏。川田泰代の逝去後に遺品整理を託された福田氏が、２幅の書に込められた深い意味を知り河正雄に託した。川田泰代と福田氏は政治犯の救援活動で知り合い、福田氏と河正雄は関東大震災時に虐殺された朝鮮人慰霊がきっかけで出会っている。川田泰代と河正雄は生前面識がなかったが、彼女が遺した２幅の書によって出会う機会を得た。偶然の巡り会いのようだが、川田泰代と河正雄は「人権」という、目には見えないが最も尊くて大切な太い絆で結ばれているのだと思う。

経済格差が広がり、社会の分断が深まる現代。コロナ禍が拍車をかけている。世界では紛争が続き大勢の難民が発生。人権抑圧のニュースも絶えない。「良心の囚人」救援や人権を守る活動に奔走した川田泰代。彼女が生涯をかけて鳴らした警鐘は決して過去のものではない。川田泰代は「言行一致の平和・救援活動家として語り継がねばならぬ人」（渡邊澄子）だと考える。

附記　女優吉永小百合さんが川田泰代の姪で、芸能界の世界に入ったきっかけは川田泰代が編集者をつとめていた『婦人画報』だったことを本書の編集過程で知った。一方の河正雄は青春時代、浦山桐郎監督に依頼されて映画『キューポラのある街』の川口ロケに尽力。ジュン役の吉永小百合さんが演じた、北朝鮮に帰る家族との別れのシーンを間近で見つめていた。「その澄んだ瞳は宝石よりも輝いて美しく見えた」。当時 16 歳だった吉永小百合さんが鮮烈な記憶として、河正雄の心に深く刻み込まれているという。人と人とをつなぐ縁とは、実に不思議で興味深い。

2021 年 2 月

菊地 正志（きくち・まさし）

ジャーナリスト、埼玉新聞記者。埼玉新聞社経済部長、編集局文化くらし部長、編集委員などを歴任。1958 年群馬県出身。さいたま市在住。

河正雄コレクションとは

河正雄コレクションは、在日韓国人２世で実業家の河正雄が約５５年かけて収集した１万２千余点の美術作品群。河正雄はメセナ（文化・芸術の支援）精神と「分かちあう心の美学」を実践している先駆者で、収集したすべての美術作品を文化・芸術の発展のために、韓国・光州市立美術館をはじめ、霊岩郡立河正雄美術館や秋田県仙北市立角館町平福記念美術館など、韓国と日本の公的な美術館等に寄贈している。

河正雄

一貫した方向性を持つ河正雄コレクションは、ディアスポラ（離散した民族）として歩んできた河正雄自身の人生が色濃く投影されている「祈りの美術」。社会的・政治的に恵まれていない、疎外された人々や歴史の渦の中で犠牲になった人々を追悼する祈りと慰霊の意味を持っている。さらに在日韓国人として故郷に対する運命的なあこがれ、自分を生んでくれた祖国の文化と美術への恩返しの気持ちが込められ、美術で韓国と日本を結ぶ懸け橋の役割を果たしている歴史的にも貴重なコレクションである。

河 正雄（ハ・ジョンウン）　1939 年生まれ（晋陽河氏）。59 年秋田県立秋田工業高校卒。72 年株式会社かわもと（不動産賃貸業）創立。韓国光州盲人福祉協会（81 年）と同会館（89 年）設立。2001 年終身光州市立美術館名誉館長就任。03 年韓国朝鮮大学校美術学名誉博士号授受。07 年韓国朝鮮大学校デザイン大学院客員教授就任。光州市・ソウル市名誉市民、全羅北道名誉道民、山梨県北杜市名誉市民。韓国の文化芸術発展に寄与した功労により、2012 年に在日韓国人で初の宝冠文化勲章を受勲した。著書に『全和凰－祈りの美術』『望郷－二つの祖国』『恨'95』『韓国と日本、二つの祖国を生きる』『二つの祖国』『祈りの美術』『念願の美術』『尋劔堂』など。

河正雄アーカイブ　https://www.ha-jw.com/

■目次

発刊にあたって
「河正雄コレクション」とは

Ⅰ　はじめに
川田泰代さんを偲ぶ～涼州詞と泛海詩 …… 5
「台湾－秋田、書がつなぐ縁」 …… 11

Ⅱ　川田泰代の足跡
プロフィル …… 12
『長い坂』より（関千枝子）
陳玉璽救援 …… 17
台湾青年の強制送還（国際会議での発言）
「ペンを折るわけにはいかない」（川田）
『良心の囚人』巻頭文（川田）
中国との絆 …… 27
「川田泰代と中国」（楊国光）
評伝（渡邊澄子） …… 35
「川田泰代という女性」
偲ぶ会・追悼文 …… 43
納骨式写真 …… 45

Ⅲ　書家の張炳煌
プロフィル …… 48
涼州詞と泛海詩紹介 …… 49

Ⅳ　資　料
「キューポラの街の原風景」 …… 55
前田直樹・研究論文 …… 56
長谷川テルの足跡をたどる（川田泰代）…… 64
手紙 …… 68
写真 …… 70

川田泰代さんを偲ぶ～涼州詞と泛海詩～

光州市立美術館名誉館長　河正雄

2020 年の新春、新型コロナ禍の波が全世界に押し寄せた。不要不急の行動自粛要請の為に仕方なく書類整理をすることにした。

整理が進む中、長年仕舞い込んであった 2 枚の書が出て来た。どこで入手したものか思い出すことが出来ない。心当たり数人に問い合わせした 1 人が福田政夫氏であった。彼は 2003 年関東大震災 80 周年記念集会以来の知友である。「思い当たらない」という返事に暗中に取り残された気持ちになった。書の内容、書格といい並の作品ではないと判断して、内容不明ではあったが、その書を表具屋に頼み二幅の掛け軸にして保存することにした。

その後、その書を入手する時に「川田」という名がふと浮かんだので再度、福田氏に電話したところ思い出されたようで、2020 年 6 月 10 日付の書簡が届いた。

「河正雄さま

前略

川田さんの「偲ぶ会」のパンフと納骨の時の写真をお送りします。

（1）偲ぶ会のパンフについて

偲ぶ会は川田さんの逝去（2001年5月5日）後の5月26日に、葬儀に代わるものとして執り行ったものです。川田家の一部の方をはじめ各界の著名人など、総勢200人以上の方が参加してくださいました。

このパンフはそれに向けて川田さんと親しかったお友達にも協力していただき、急遽資料を集め作成したものです。

そのパンフの内容の中心になっているのが、川田さんを紹介するのに最もいいと思った『長い坂－現代女人列伝』（関千枝子著　影書房　1989年刊）という本です。この本が一番川田さんのことを詳しく紹介していると思います。著者の関千枝子さんという方は私は知りません。

(2)納骨の時の写真

川田さんがお亡くなりになり、遺体は川田家の親族が引き取りました。川田さんの亡くなった後のさまざまな事後処理は、川田家の親族が引き受けてくれました。とくにいろいろ私たちとの連絡役をやって親切に対応して下さったのは、吉永小百合さんのお姉さんで、当時東京都庁に勤務されていました。都庁でかなり重要な位置にいて大事なお仕事をされていたようです。にもかかわらず、お忙しい中、とても親切にきちんと私たちに対応してくださいました。

葬儀は密葬で遺体処理だけをして、葬儀の代わりとして川田家の親族だけで納骨式が5月10日に執り行われました。親族以外で例外的に私たちの関係者だけが参列を許され、十亀トシ子(ペン・高橋陽子)さん、橋爪君、私など5名が参列いたしました。

それが今日お送りする写真です。この時吉永小百合さんも参列されており、ほんの少しだけ小百合さんと会話をしました。小百合さんは『婦人画報』に掲載された小百合さんの古い子供の時の写真を持参されてきており、それを見せながら「私がこういう芸能界の世界に入ったきっかけは叔母(川田さん)のお陰なのです。叔母が『婦人画報』の編集者をしていた関係で、子供服のモデルとして『婦人画報』に掲載されたのです。それがこの世界に入るきっかけをつくってくれたのです。その時の写真を一緒に埋葬してもらおうと持ってきたのです」とおっしゃっていました。

朝日人物辞典に、川田さんについて吉永小百合さんが「自由奔放の言論人」と述べられていますが、まったく的確な表現です。また生き方も本当に破天荒な方で、そして恐れを知らず不正義に立ち向かう正義感のとても強い方でした。今、安倍内閣を先頭に数々の不正義が平然とまかり通っている現代、川田さんのような方の存在がどれほど大きな力を発揮したことかとしみじみ思います。

私が川田さんと接するようになったのは 1997年頃で、その頃、川田さんは様々な不運な問題が重なり、財政的にも大変困窮されていました。この川田さんの直面している問題を解決するために協力を依頼され、それ以降私は川田さんと直接頻繁に会うようになりました。そして川田さんの直面している問題解決のために全力をあげました。その結果ようやく問題が解決し、新しいアパートも借りて新しい生活が出来るようになりました。

川田さんは私生活的にはたしかにハチャメチャなところがある方でした。でもその生き方の根本はまっすぐで、差別されたり虐げられたりされている人々への深い思いと、それを生み出している政治と社会に対する激しい怒りは本当に大きく、実に立派で素晴らしい方でした。

ところで川田さんと私たちとの関係は、1960年代末頃に遡ります。中国や朝鮮など世界の国々との精力的な民間交流と政治犯の救援運動、さらに私たちの仲間である星野文昭さん（1971年11月の沖縄闘争デモで機動隊員1名が死亡した事件でまったくのデッチ上げで逮捕。無実の政治犯として47年間も監獄に閉じ込められ、再審闘争中の2019年5月に刑務所の医療放棄によって膵臓ガンで逝去）をはじめ、私たちの運動と仲間にかけられた様々な弾圧に対する救援運動の先頭に立って多大な貢献をしてくださいました。そのご恩はけっして忘れることはできません。

尚、1960年代から川田さんと古くから交流があったのは十亀トシ子さん（1947年生まれ）です。私は事情で東京にいなかったため川田さんとは1997年頃まで直接接触はありませんでしたが、しかしその活躍は当然知っており、深く尊敬しておりました。十亀トシ子さんや橋爪君たちと共に、川田さんがお亡くなりになるまでいろいろと家族同様にお世話をしました。

川田さんがお亡くなりになって20年近くになりますが、毎年命日の5月5日に橋爪君、十亀さんたちと欠かさず青山のお墓にお参りに行っています。

2020年6月10日　福田政夫」

2020 年 6 月 27 日、福田政夫（1943年生）、橋爪利夫（1948 年生）両氏の案内で昭和のジャーナリスト、平和運動家である川田泰代さん（1916 年－2001 年）が眠る青山霊園に赴いた。

両氏が 2001 年 5 月 10 日川田さんの納骨式に参列以来、毎年命日の 5 月 5 日には墓参しているというので案内を請うた。私はこれまで知人の葬儀では何度か来園したことがあったが、墓所への参拝は初めてであった。

青山霊園は明治 7（1874）年に開設され、明治維新の功労者や文学者、科学者、芸術家、政治家等の著名人の墓所が多数あり、墓参者は元より歴史探訪の見学者が多数来園する港区のビル群の中にある広大な霊園であった。川田さんの墓所は 1 種（ロ）4 号 6 側 2 番に所在していた。私は墓を清めて花を手向け追悼の言葉を述べた。

「私が墓参に参りました理由の一つは川田さんが生前、韓国人金大中、尹秀吉、崔昌一、金鉄佑氏ら、他にも多くの政治犯救援を呼び掛け救ってくれましたことに感謝申し上げたく思ったからです。

もう一つ、私は川田さんの遺品である 2 枚の書を掛け軸にして所持しておる由縁からです。1 枚の書は王陽明（1472 年－1528 年）の泛海詩、もう 1 枚は王翰（687 年－726 年？）の涼州詞です。そ

の書は昭和 56（1981）年の席書で張炳煌氏（1949 年－）が川田さんに贈られたことが判りました。

川田さんの遺品整理の時に福田さんが受け取られ、10 数年前に私に託されたものでした。これからは張さんとの交友の経緯や席書の持つ意味を知り、川田さんの魂が落ち着くところに収めようと思います。」と報告し、墓前を辞した。

墓参を済ませて中華人民共和国駐日本大使館に張炳煌氏の所在を問い合わせたところ、台湾の著名な書家であると返事が届いた。追って台北駐日経済文化代表処に問い合わせると現役として活躍されており、日本語も流暢で日本書道界にも知られたる著名な人物であることが判った。

川田泰代さんについては福田氏の書簡にも書かれているが、▽『20 世紀人物事典』（2004 年刊）▽『朝日人物事典』（1990 年刊）▽『長い坂－現代女人列伝』（関千枝子、影書房、1989 年刊）▽川田泰代さんを偲ぶ会パンフレット（2001 年刊）などに記されている。張炳煌氏については、▽百度百科（Baidu 百科）▽産経新聞国際書会 Facebook、などに経歴や活動などが記されている。

これらから不明であった事柄に光が射したことで、私の故郷である秋田県仙北市立角館町平福記念美術館に収めようと即断した。美術館には私の美術コレクションが収蔵されているからだ。仙北市の田沢湖と台湾高雄市の澄清湖は姉妹湖である。それらの縁故から相応しいと思ったからだ。

書家峡山・植松永雄、歴史研究家・茶谷十六両氏の助けを受け、涼州詞（王翰作）と泛海詩（王陽明作）を学んだので共有したい。

王翰　涼州詞

原文

葡萄美酒夜光杯	葡萄の美酒　夜光の杯
欲飲琵琶馬上催	飲まんと欲すれば　琵琶馬上に催す
酔臥沙場君莫笑	酔ひて沙場に臥すとも　君笑ふこと莫かれ
古来征戦幾人回	古来征戦　幾人か回る

現代語訳（口語訳）

ぶどうで作ったうまい酒を、（月光を受けて）夜光の杯にそそぐ。飲もうとすると、琵琶の音が馬の上に鳴り響いた。酔って砂漠に倒れ伏してしまっても、君よ、笑ってはいけない。昔から、戦争に行ったもののうち、どれだけの人が帰ってきただろうか。（私たちも明日もしれない身なのだから）

王翰　プロフィール

中国・唐代の詩人 687 年～726 年？。字は子羽。并州晋陽県の出身。豪放な性格で酒を好み、家に名馬と美姫を集めて、狩猟や宴会に日を送っていた。711（景雲2）年、進士に及第して駕部員外郎に任ぜられたが、晩年は不遇であった。酒をこよなく愛し、題材にとった作品が多く見られる。

王陽明　泛海（海に泛（うか）ぶ）

原文

險夷原不滞胸中	険夷　原より胸中に滞らず
何異浮雲過太空	何ぞ異ならん　浮雲の太空を過ぐるに
夜静海濤三萬里	夜は静かなり　海濤三万里
月明飛錫下天風	月明　錫を飛ばして天風に下る

現代語訳（口語訳）

逆境であれ順境であれ、それらに心を煩わされることなどない。人生行路の逆境・順境など意に介さない。それらは、あたかも浮雲が空を通り過ぎるようなものなのだから。静かな夜の大海原に、海の波が三万里の彼方まで続いている。その三万里の海上に小舟を浮かべている。月明かりに乗じて錫杖を手にした道士が天風を御しながら飛来する、まるでそんな広大無碍な心境である。

王陽明　プロフィール

王陽明（本名・王守仁）　1472年～1529年。中国、明代の学者・政治家。字(あざな)は伯安、号は陽明、諡(おくりな)は文成。余(よ)姚(よう)（浙江省）の人。弘治12（1499）年、進士に及第。寧王(ねいおう)の乱を平定し、名声を博した。朱子学を批判し、心即理・知行合一・致良知を説き、陽明学を完成させた。著書に『伝習録』『王文成公全書』などがある。

書家張炳煌氏が川田さんの生き様と人格に尊敬と感謝の念を込めた、席書で読み解くほどに意味深いものである。張炳煌氏の作品が収まり川田さんの遺徳を偲ぶことが出来るのは私の美術人生において喜びである。

「台湾－秋田、書がつなぐ縁」　河正雄

（「秋田さきがけ」、2020年10月2日付）

秋田さきがけ　2020年(令和2年)10月2日　金曜日

文化

台湾－秋田、書がつなぐ縁

ジャーナリスト川田泰代さんの形見

河　正雄

新型コロナウイルス禍で外出自粛を余儀なくされた今春、長年たまった書類を整理していて2枚の書を見つけた。内容といい風格といい、並の作品ではなさそうだったが、誰の作品なのか分からない。

記憶をたどると、前の所有者は「カワタ」という名前で、知人の社会運動家・福田政夫氏を通じて入手したことを思い出した。福田氏に問い合わせたところ書簡が届き、「カワタ」とはジャーナリストで平和運動家の川田泰代さん（1916～2001年）であることが分かった。

川田さんは大学卒業後、「婦人画報」の編集記者を経てフリージャーナリストとして活躍した。女優の吉永小百合さんは川田さんのめいに当たる。

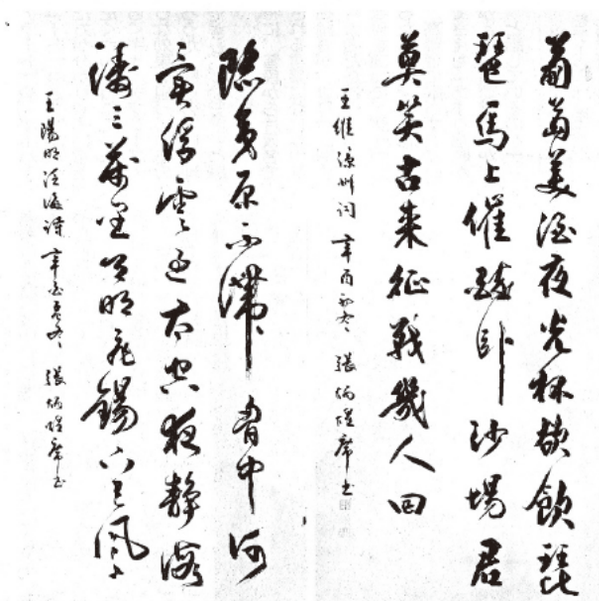
福田氏の書簡には、次のように記されていた。

「（川田さんは）恐れを知らず不正義に立ち向かう正義感のとても強い方でした。安倍内閣を先頭に数々の不正義が平然とまかり通っている現代、川田さんが存在すれば、どれほど大きな力を発揮したことかと、しみじみ思います」

「朝日人物事典」（朝日新聞社）によると、川田さんは台湾独立運動に関わった陳玉璽、日本で韓国の反政府運動を行った尹秀吉、韓国の民主化を求める運動を行った金大中ら、日本では忘れられがちな政治犯＝「良心の囚人」の救援活動に取り組んだ硬骨のジャーナリストだった。事典では、吉永さんが川田さんを「自由奔放の言論人」と呼んでいたことも紹介していた。

福田氏は、川田さんと公私にわたって交流し、川田さんが亡くなったときには、親族だけで執り行った納骨式への参列を許されたという。福田氏の書簡には、次のエピソードも記されていた。

「（納骨式には）吉永小百合さんも参列し、ほんの少しだけ会話しました。小百合さんは『婦人画報』に掲載された子どもの時の写真を持参されており、『私が芸能界に入ったのは叔母（川田さん）のおかげです。叔母が婦人画報の編集者をしていた関係で、子供服のモデルとして私が掲載され、それが芸能界に入るきっかけとなりました。その時の写真を一緒に埋葬してもらおうと持ってきたのです」



台湾の書家・張炳煌氏の書。左が王陽明の「泛海詩」、右が王翰の「涼州詞」

2枚の書は、川田さんの遺品を整理した福田氏が受け取り、十数年前に私に託したものだった。福田氏らの協力を得て調べたところ、いずれも台湾の著名な書家・張炳煌氏（1949年～）の作品で、張氏が81年、川田さんに贈ったことが分かった。

知人の書家・槇松永雄氏と歴史研究家・禁谷士六氏の協力で、書に書かれているのは王陽明（1472～1528年）の「泛海詩」と、王翰（687～726年）の「涼州詞」であることも判明した。以下にその現代語訳を紹介する。

泛海詩　王陽明

逆境であれ順境であれ、それらに心を煩わされることなどない。人生行路の逆境・順境など意に介さない。

それらは、あたかも浮雲が空を通り過ぎるようなものなのだから。

静かな夜の大海原に、海の波が三万里の彼方まで続いている。その三万里の海上に小舟を浮かべている。

月明かりに乗じて錫杖を手にした道士が大風を御しながら飛来する、まるでそんな広大無碍な心境である。

涼州詞　王翰

ぶどうで作ったうまい酒を、月光を受けて夜光の杯にそそぐ。

飲もうとすると、琵琶の音が馬の上に鳴り響いた。

酔って砂漠に倒れ伏してしまっても、君よ、笑ってはいけない。

昔から、戦争に行ったもののうち、どれだけの人が帰ってきただろうか。（私たちも明日もしれない身なのだから）

張氏は、台湾の陳玉璽を支援した川田さんの生き方に感銘を受け、この詩を選び、彼女に贈ったのだろう。書を読むほどにその意味の深さを感じた。

書の来歴を知った私は、故郷仙北市の角館町平福記念美術館に寄贈することを決めた。美術館には、私が収集した美術コレクションが収蔵されており、仙北市の田沢湖と台湾高雄市の澄清湖が姉妹湖だという縁もある。書を託す上でこれほど適した場所はない。

こうして書は8月、美術館に収蔵された。この2枚の書をきっかけに、多くの人に川田さんの遺徳をしのんでもらえたら、これに勝る喜びはない。

ハ・ジョンウン　1939年東大阪市生まれ。幼少期から高校時代まで田沢湖町（現仙北市）で過ごす。秋田工高卒。韓国・光州市立美術館名誉館長。朝鮮大学校美術学名誉博士。埼玉県川口市住。

「朝鮮女性と連帯する日本婦人代表団」の副団長として、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）を訪問した川田泰代さん（前列左から４人目）。金日成国家主席との記念撮影＝1978 年９月 17 日～10 月８日

川田泰代　プロフィル

1916（大正５）年８月 12 日大阪府大阪市生まれ。37 年東京女子大学卒。雑誌『婦人画報』記者（結婚のため一時退社）。50 年雑誌『婦人画報』に復帰、編集長を務める。62 年同退社。60 年第２回世界ジャーナリスト集会（バーデン）に参加。第 11 回中国国慶節に中華全新聞工作者協会に招かれ参加。ソビエト、東ドイツ、ハンガリー、チェコソロバキアのジャーナリスト協会より招待、見学。65 年インドネシアにおける外国軍事基地撤去のための国際会議に参加。66 年孫文先生生誕百周年記念委員会事務局長。婦人文芸同人、編集委員、アムネスティ・インターナショナル日本支部理事などを歴任。2001 年５月５日腎不全のため死去。84 歳。

（川田泰代著『良心の囚人－陳玉璽小伝－』1972 年発行 亜紀書房 著者略歴より。一部追加）

べ平連の活動では、1968 年８月の「反戦と変革に関する国際会議」（京都）に参加されたのをはじめ、多くの集会やデモなどの活動に積極的に参加した。特に金大中らアジアにおける多くの政治犯「良心の囚人」の救援活動に力を注ぎ、川田さんらの努力によって減刑などをされた「良心の囚人」たちの中には、陳玉璽（台湾）、崔昌一、金鉄佑・喆佑兄弟（韓国）ら多くがいる。川田さんの姪の吉永小百合さんは、川田さんのことを「自由奔放の言論人」と呼んだ。

（べ平連ＨＰより）

■「長い坂～現代女人列伝」

寝食忘れ良心囚救援活動

川田泰代　一九一六年（大正５）生まれ

関　千枝子

「長い坂～現代女人列伝」（影書房）より

川田さんの肩書を書くときに、ハタと考えこんでしまった。

朝日新聞社編『現代人名事典』を見ると〈ジャーナリスト。主としてアジアにおける政治犯「良心の囚人」救援活動に力を注ぐ平和運動家……〉とある。「ウーン、私の職業ねえ……。ジャーナリストといったって、金になるような原稿も書かないし、団体役員とつけてくれるときもあるけど、小さな団体だしねえ……。要するに私は“落ちこぼれ”なのよ」

“平和運動家”とか“救援活動家”というのが“職業”になるのか。一応、ジャーナリストと肩書をうって、川田さんの自称する“落ちこぼれの生き方”をたどってみよう。「落ちこぼれ？　あんな大きい人（川田さんは体格も大きい）落ちこぼせないよ。はみ出しているだけだよ」というかげの声もあるが――。

※

一九八七年八月十二日、川田さんは七十一歳の誕生日を、ニューヨーク・クイーンズ区の陳玉璽さんの家で迎えた。川田さんをして“救援活動人生”を送らせることになった、元台湾の死刑囚陳さんは、いまニューヨークに住み、三十年月賦の小住宅を買い、家族と幸せに暮らしている。陳さんの二人の子どもが、父の生命の恩人・川田さんのために、「ハッピーバースデー」を歌ってくれた。川田さんは相変わらず世界中をとびまわり、こわいものなしの活動ぶりである。

（取材時六十八歳）

父の影響強く受け

川田さんは一九一六年（大５）の生まれ。お父さんは“旗本”の子孫で、台湾で育ち、孫文に傾倒し“三民主義”を日本ではじめて翻訳、自費出版した人である。川田さんがもの心ついたころは日本郵船ＫＫの傍系会社大観社社長、主に英文世界年鑑を出版した。非常に進歩的な面とサムライ気質を併せ持っていた人で、川田さんはこのお父さんから非常に影響を受けたようだ。「きょうだい七人で私は二女。長女というのはよく出来て、美人で才女でもあり―――。まあ私はこの

ころから落ちこぼれなのよ」。ちなみにこの“長女”は、女優吉永小百合さんのお母さんである。

東京府立第一高女を経て東京女子大に入る。「長谷川テル（注）は親類でね、あのころうちによく来ていたの。とても私によくしてくれてね。今思うと私に何か――中国のことなどしゃべりたかったのじゃないかと思うんだけど、当時の私は、政治的に全く無知な女子大生でしょう？　彼女は何もいわずに去ったの。いまだに自分の無知を残念に思うわよ」

一九三七年（昭12）東京女子大を卒業した川田さんは「婦人画報」の記者になるが一年半ほどで結婚退社、主婦になり三人の子をもうけた。が、一九五〇年（昭25）離婚、「婦人画報」にカムバツクする。十年間悪戦苦闘したが、ものの見方、考え方、すべて夫とくいちがってきた、という。たとえば朝鮮戦争、夫は戦争でもうける立場だったし、妻は戦争絶対反対だった。川田さんは子供三人を婚家に残し身一つで飛び出してしまうが、結局は上下の二人は自分で養育する。「娘が大学の試験に受かったのに向こうの前夫もその両親も絶対入学を許さないのよ、女に学問はいらないって。そんなバカなって、私が親権がなくても保証人になって大学に入れてね」

川田さんは、主に“政治、社会”を担当した。ファッション関係の誌面の多い「婦人画報」では異色の硬派記者として活躍した。一九六〇年（昭 35）、日本ジャーナリスト会議の代表団の一人に選ばれ、オーストリアのバーデンで開かれた第二回世界ジャーナリスト会議に参加、その途上中国やソ連、東欧にも寄った。戦後、初の外国旅行で大変楽しかったのだが、アメリカの雑誌等で“アカイ代表団”と非難されたりしたため、帰国した川田さんを待っていたのは、社会や職場でのひどい中傷と圧迫だった。

あらぬ中傷を浴び

「私なんかペーペーの平団員だし、何てことはないのに」と川田さんは笑うが、当時は安保闘争のすぐあと。米誌にヒステリックな中傷記事が出ても不思議ではない情勢だった。こうしたこともあって「婦人画報」から「モダンリビング」の編集長にかわる。川田さんにとっては。“左遷”だが、社内的には“いいポスト”という解釈もあって、苦労も多かったようだ。ちょうど、娘さんが大学の建築科を卒業したが、当時は建築家の女などになかなか就職口はない。「モダンリビッグ」に行っては、と大江宏法大教授から話があり、母娘一緒の会社にいるわけにもいかないと、一九六二年（昭37）ついに退社。

フリーになっても困らぬようあらかじめ根回ししておくことなどとうてい出来ない川田さんだから、原稿の注文はわずか。生活は苦しかったようだ。“もうかる”話はあまり来なかったが、“金にならぬ”仕事の依頼はいくらでも来て、忙しいことは猛烈に忙しかった。

そんな仕事の一つが一九六六年（昭41）から一年間、日本と中国との連帯で催された孫文生誕百周年記念事業委員会の事務局長役だ。この事業が始まったころ、中国は文革が進行中。“親中派”の人の中には孫文なんて古いよ、と冷笑する人もいた。川田さんは父親の関係もあって孫文を昔から尊敬しており、誰が何といおうと、中国革命の父は孫文だ、と思っているから、はりきってこの役目を遂行した。陳玉璽青年が、一九六七年九月から十一月まで川田家に寄食したのも、こうした関係からだった。それまで川田さんは陳玉璽青年と一面識もなかった。陳君は台湾の中農の生まれ。成績優秀だったので、一家は苦労して彼を台湾大学に上げた。大学でも抜群の成績で、ハワイ大学の奨学資金の試験に合格、修士の資格を得、経済学部の助手にとりたてられた。さらにブラウン大学で博士課程の勉学を続ける資格を得たとき、突然、国府から帰国命令が来た。ベ

■「長い坂〜現代女人列伝」

トナム反戦デモに出たことがある彼に思想上の疑惑が向けられたらしく、帰国すれば獄につながれることは、はっきりしていた。アメリカ滞在も自由にならず迷う彼に、日本へ行けば何とかなるとすすめる友人たちがいた。陳君は観光ビザで一九六七年八月日本へ入った。

窮鳥懐ろに入れば

身よりもなく日本語も出来ず、困っていると聞くと川田さんは放っておけなくなる。「窮鳥ふところに入れば……というでしょう。親父ゆずりのサムライ根性よ。宮崎滔天も孫文の保護に尽したでしょ」

陳青年は観光ビザ延長の手続きをし、法政大学大学院で学ぶことを希望する。一九六八年一月、入管へ特別在留許可を申請。法政大教授からも添書きが出、陳君は、在留のための身元保証金十万円も納めている。二月八日、入管からの指示で陳君は入管へ行き、それきり帰らなかった。

川田さんは驚いた。ところが、陳君を川田さんに紹介した反国府華僑の利益をはかる団体なども意外に冷たく、「入管にいるのだろう」とか「自由意思で帰国したのだろう」とか、情報さえあやふやで、どうなったのかはっきりしない。川田さん一人で走りまわり、ツテをたのんで調べまわった。陳君は入管に出頭した翌早朝そのまま台湾に送り返されたこと、台湾で獄につながれており死刑の恐れもあること、家族ですらツテを介してやっと居場所がわかったなど、すべてがはっきりするまで二ヵ月かかった。川田さんは怒った。出入国管理令にもない異例の即日強制送還を行なうなど、入管のやり方は全く不法だ。死刑の可能性があるのだ。川田さんは誰彼なしに協力を頼んだ。特に日中友好関係の団体の主要な地位にいる人には熱をこめて語った。が、驚いたことに、誰も救援活動にのり出してはくれなかった。遠まわしに「あまりムキにならぬ方がいい、スパイかも知れない」という人もあり、「陳君は国府籍だから……」という人もいた。

「あなたたち“一つの中国”といっているんじゃなかったの！」。地球よりも重い人間一人の生命が危いというときにもミコシをあげない“進歩的文化人”に川田さんは激怒した。ようやく社会党の猪俣浩三代議士（当時）を紹介されたのが“命綱”の一つとなった。猪俣氏はただちに、これはおかしいと、衆院法務委員会でとりあげてくれた。その直後、「東京オブザーバー」（大森実氏主宰の週刊紙、現在廃刊）の中島照男記者（のち、カンボジアで取材中死亡）が訪れ、四月三十日号の紙面で大々的に報道してくれた。この新聞が発売された日、川田さんは駅から駅へと歩き「東京オブザーバー」を何十部も買いこみ、支援してくれそうな友人知人に発送した。

このとき川田さんは思いついて陳君のいたハワイ大学の教授に手紙を書き、新聞を送った。ところが驚いたことに――ハワイでは、うてば響くような運動が起こったのだ。学生大会の議題にとりあげられ、ハワイ選出下院議員パッシイ・竹本・ミンク女史に協力を訴えるなど、学生たちは精力的に動いた。ハワイの主だった新聞にも一斉に報道された。日本人留学生たちも、川田さんの送る資料や新聞を徹夜で翻訳するなどがんばった。川田さんはこのアメリカの運動に目を見張った。川田さんは“アメリカの帝国主義的政策”を激しく非難する一人だった。が、一人の人間の生命に対するこれほど敏感な反応――。アメリカの民主主義の底力を川田さんは今さらながら思い知った。

陳君ついに釈放へ

こうしたハワイの運動に刺戟され、陳君がハワイでのベトナム反戦活動で死刑の宣告を受けた

■「長い坂～現代女人列伝」

ことがはっきりした六月二十四日（事件後半年目）、ようやく日本でも「陳玉璽君を守る会」を結成することができた。この会の世話人は、宮崎竜介（弁護士）、中村哲（法政大学総長）、高木健夫（評論家）、中村敦夫（俳優）氏らで、根廻しの中心の川田さんは名も見せていない。孫文百周年記念事務局長ら、日中関係の団体にも名を連ねている川田さんが、自分の名を出すことで、台湾にいる陳君に不利になってはとの配慮である。

その後、陳玉璽氏を守る運動は長い曲折をたどる。国際的な運動が効を奏し、死刑から禁固七年になり、さらに一九七一年（昭46）異例の釈放となった（現在陳氏は結婚し、ニューヨークに住んでいる）。

アムネスティーインタナショナルのアメリカ支部が陳玉璽救援運動にとりくみ、釈放に大きな力になったこと、コロンビア大教授、アイバン・モリス博士が来日、日本でも、同組織の支部を作るよう川田さんに要請したことから川田さんは、政治、宗教、信条の故に抑圧を受けている。“良心の囚人”を助ける国際組織があることを知った。川田さんはまたしても走り廻り、猪俣浩三氏とはかり、一九七〇年の四月、アムネスティ日本支部の結成に成功した。つづいて、金大中氏拉致事件や在日韓国人政治犯釈放運動に取組み日本支部代表として、欧米に数回出かけている。

川田さんはいま、一時常任理事だったアムネスティ日本支部の役員からもひいて“一会員”になっている。「ああいう会は作るのはやさしく、維持するのはむずかしいのよ。私はどうも維持の方には向いていないタチなのよ。“落ちこぼれ”……」。陳玉璽氏をはじめ、自分が命を助けたと自負している。“良心の囚人”は多いし、もちろん今でもアムネスティの一員として釈放運動にとりくむこともある“一人”で運動することもある。いま熱を入れているのは、星野文昭君という死刑宣告を受けた中核派の青年の助命運動。「私、中核派でも新左翼でもないわよ。中核と革マルが、どうちがうかも知らないのよ。だけど新左翼というので誰も何にもしてやらないから私が出て行くのよ。私、死刑反対論者だし明らかに保守政治の圧力でエン罪が作られていることを腹立たしく思ってるのよ」

「この間、徳田球一をしのぶ会とかいうのに行ったわよ。いや、別に私、徳球がどうこうというのじゃないけど、あの人も“落ちこぼれ”じゃない。誰もが忘れちゃったような人のところへ行ってやりたくなるのよ」

（注）長谷川テル＝エスペランティスト。一九一二年（明45）生れ、奈良女高師中退、在日中国人劉仁と結婚、中国へ。日中戦争中、抗日反戦放送のアナウンサーとして活躍、一九四七年病死。

関　千枝子（せき・ちえこ）　1932年大阪に生まれる。早稲田大学文学部露文科卒。毎日新聞記者を経て、現在、「全国婦人新聞」編集長。「横浜の図書館を考える集い」代表。著書『広島第二県女二年西組――原爆で死んだ級友たち』（筑摩書房）『図書館の誕生－ドキュメント日野市立図書館の20年』（日本図書館協会）『この国は恐ろしい国――もう一つの老後』（農山魚村文化協会）

（『長い坂－現代女人列伝』より）

■陳玉璽支援

台湾青年の強制送還

川田泰代

反戦と変革に関する国際会議での発言
（1968年8月11～13日、京都・国立国際会議場）

司会者　川田泰代さんにご発言願います。

川田泰代　私は実はここ一年ばかり台湾青年の陳玉璽の問題をかかえておりました。それでこの三日間の会議を通じまして、台湾の問題には触れられませんでしたので、陳玉璽という学生についてお話ししたいと思います。

▼陳玉璽事件

ちょうど一年前の八月十七日に、かれがハワイの友人から紹介されて私のところへやって来ましたが、その青年が日本に来たときに、なぜかおぼえているのです。それで、あなたは何がしたいのかと言いましたら、自分は台湾に帰れば十年くらいぶち込まれてしまうと、そういうことなんです。じや、あなたは何をしたのかと聞きましたらば、北爆反対のデモに出、その時に、ちょうど手を振り上げたのをテレビに写されて、それが仲間を扇動しているような形で台北でも放映されたと、台北の友だちから知らせがあった、そして「きみ、そんなことをしたら、大変に危険だからやめなさい」と言ってきた、というのです。

かれはハワイ大学のイースト・ウエスト・センターで経済学を勉学中で、一年間助手を勤めておりました。非常に成績がいいので、ハーバードのサマースクールにも行ったし、ブラウン大学という経済学専門の学校で PHD をとるコースを申請しましたところが許可されて、アメリカ側は許可したんですが、一九六七年の七月に、台湾政府が即時帰国しろということを言ってきました。それで、かれは自分に何か嫌疑がかかったなということで、友人たちが日本へ行きなさい、日本へ行ってしばらくほとぼりがさめるまでそこにいなさい。もし、日本に長くいられないとすれば、中華人民共和国というところもあって、あなたは中国人であるから、一つの中国というものを認めるならば、そっちへ行く可能性を日本で待っていたらどうか、ということで来日したというわけなのです。

私は、実はいつも新聞に飛び飛びに発表されているので、みなさんは私がなんでこんなことを言わなければならないかおわかりにならないと思いますので、きょうは覆面を脱ぎます。それはちょうど私がベ平連に訴えに来たときには、かれが死刑の求刑をされているものですから、それに対してみなさんのご助力を得て死刑にストップをかけたいと思ったんですけれども、この問題は毎日毎日動いております。そしてきのうの朝刊に、かれは軍事法廷でもって七年の減刑になったということですので、私が訴えようとしましたすべての文章は旧約聖書になってしまいました。それでとりあえず命だけは助かるということになりましたから、私、夕べちょっとまた台湾の軍事問題の専門家に夜中に電話をかけて、私がほんとうのことを言ってもよいか、またほんとうのことを言っちゃうと台湾はかれにまた死刑の求刑をするかもしれない――台湾というのは非常に

■陳玉璽救援

変動の激しいところですから、そういったことがないだろうかと尋ねましたら、判決がおりたばかりだから、もうそれより重くなることはないから、ということでしたので、日本の国内の問題として、強制送還の問題とか、いろんなものが関係してくるから、思う存分みなさんに訴えて、陳玉璽個人のことではなしに、こういう問題はこれからどんどんあると思いますから、みなさんと一緒に考えていただきたいと存じます。

▼起訴の理由

かれの起訴された理由を、もしもご自分が台湾に生まれたらどんな目にあうだろうかという仮定のもとに考えていただきたいと思います。陳玉璽はアメリカに留学中、「中国画報」と「人民日報」と毛沢東の詩を常に読んでいた。それから日本へ来て、東京華僑総会の副会長のところに行って、大陸に行きたいということを訴えた。それでそのあとで、その副会長の紹介によって「大字報」という新聞で働いていた。それから昨年の十二月の二日以降一月の十七日までの間に、ペンネームで、「大字報」にアメリカと日本の経済は危機に瀕しているという論文と、もう一つは曲技団の革命的感情という二つの論文を書いた。それが原因で日本政府が中国の大使館に引き渡して、それで本国送還になった、とこれだけのことです。それで反乱条例第二条第一項の罪、反乱条例第十条後段とか、軍事侵犯法第一四五条第一項とか、三つも四つも付いているのです。それで台湾の六法全書というものを買って、一生懸命読んでみますと、死刑というのが二つ付いていて、家族も財産没収というようなことなんです。

ですから、これに対して非常に不合理だと思いましたので、とりあえず日本の入管が強制送還させたという事実がありますのですから、それに対して抗議を申し込もう、それは六月二十四日のことですが、ところが六月二十一日にUPIから、陳玉璽はアメリカにおけるベトナム戦争反対のために、治安妨害罪に問われて軍事法廷にいる、それで死刑も求刑されているという外電が入ったものですから、日本としては政府が加担していることなので、われわれ民間人としても、黙っていては日本に人間がいないということになりますから、かれの身元引き受け人になっていただきました宮崎龍介さん――宮崎滔天の息子さんで、親子代々中国人の長いお友だちでいらっしゃいます――法政大学総長の中村哲さん、読売新聞の論説委員の高木健夫さん、法政大学の経営学の教授の松岡さん――陳君はこの先生について日本でしばらく勉強するという態勢を整えていたのです――それからブリティッシュ・コロンビア大学の加藤周一さん――加藤さんは陳君が日本から強制送還されて、そのままかれのところへも何の手紙もよこさない、そうして、やっとわかったのが四月の十二日ごろ。二ヵ月後に、陳君のおとうさんから――おとうさんのところへもなにも知らせがなかったんだけれども、気違いのようにさがしていたら、瞭君が軍事裁判所に、治安警備指令部の軍法所というところの留置所に抑留されているということがわか．ったというので、私や中村先生がアメリカにそういうことを知らせて、アメリカでもなにか陳君のために働いてほしいという電報を打ちました。それがアメリカのプロフェッサーからブリティッシュ・コロンビアのプロフェッサーのところへいって、加藤周一さんがブリティッシュ・コロンビアのプロフェッサーであったものですから、そこへ特別電報がきて、陳玉璽のことについてなにか働くようにと、それから東大の石田雄先生、このかたはハワイの東西文化センターで教鞭をとっていらっしゃいました、それから俳優座の中村さん、このかたも東西文化センターで演劇を勉強していた、そういうなにか陳君と一面識あるかただけ、とりあえず七人のかたが世話人になっていた

だきまして、記者会見をいたしました。そして四つの要求をわれわれは政府および国連と国際赤十字に向かって発送いたしました。

それをちょっと読み上げてみたいと思います。

一、陳君の事件につき、政府はその事実を調査し、同君の生命の安全と人権の保障につき万全の策を講ずること。

二、日本政府と中華民国政府との間に強制送還に関する密約があったとの疑惑が持たれている現在、中華民国政府に対しても陳君の裁判の事実関係を明らかにすることを希望し、本人の生命の安全はもとより、その人権が充分に保証されることを要請する。

三、政府は送遼に対し、本人の意志確認の公正な手続きを確立すること。

四、国会においてすみやかに政治的亡命に関する法律を成立させること。

この四つの理由のいくつかがベ平連のやっていらっしやるスローガンと重なるものですから、私は勇気を持ってここで訴えさせていただくわけです。

▼私たちの支援の運動と一つの事件

それで、せめて終身刑ならばいい、死刑でなければいいと、死刑というものは――死刑廃止が理想なんですから、それも普通の民間人が死刑になるということに対しては、われわれは断固抗議しなければならないということで蒋総統とか、張群さんとかに電報を打ちまして、それで六月二十一日から今日までほとんど一日おきぐらいにAP、UPとか、そういうニュースが入ってくるたんびに、追っかけ追っかけ、その対策を立てたわけです。そのために、われわれは大衆に訴えることができなかったのです。それでまず六月二十四日以前には私は一番陳君と長く付き合っていた関係で、はんとうに孤立しながら、どこへ訴えに行っていいか大変にまよってしまいました。それで国会の法務委員会に訴えるということが一番いいと思い、猪俣浩三先生にお願いして、四月十九日と二十六日と、さらに八月五日と三回、非常にしつこく政府の責任を追及したわけです。そうすると、中川入管局長は官僚らしく、ぬらりくらりやって、非常に誠意がないんですけれども、それでも言わないより言ったほうがいいと思って、しつこく、食い下がりました。

陳君の問題と、三月二十七日に起こりました柳文卿という人の事件とはあまりにもよく似た事件なのです。強制送還されるのを拒否して、かれの十人の友人たちが羽田空港になだれ込んできて、かれを奪還しようと思ったけれども、三十人の法務省の保護官というのに押えられて、とうとう連れ去ってしまった事件がありました。この事件は大変マスコミに訴えられたものです。その後柳文卿さんは逮捕されないで、自宅で禁固というようなことになっております。

それで、この非常に類似した事件の裏には去年京都市出身の田中伊三次氏が法務大臣のときに、中川入管局長と、佐藤総理が台湾に行かれたあとに、台湾に行きまして、それで国家安全局というところと密約を結んだと言われているのです。大村収容所に二百人の麻薬密貿易の違反者が収容されている、それを代々の日本の内閣総理大臣が、岸さんもそうだし、池田さんの時も、引き取ってもらいたいとこちらから要求するのに、台湾政府は拒み続けていたわけです。そうして、先ほどの軍隊の脱走走兵引き渡しのような影の条約が結ばれたわけです。

私のところにいた陳玉璽はあとからわかったことですが、麻薬密貿易の犯人三十人に一人政治犯を引き渡すという裏契約によって連れ去られたわけです。そのあとが柳文卿さんです。それで

■陳玉璽救援

台湾で毛匪とか、共匪というのが一番罪が重くて、それで独立青年連盟の人たちも何でも、政府批判の人たちほ共匪という共産党匪賊に属するわけです。それを二本立てでもって間引いたわけです。そういうことが発覚しました。それで入管局長ほ在日の台湾の陳大使との間に覚え書をとりかわしているのです。その覚え書は転向すれば勘弁してやる、命だけは助けてやるというような覚え書なのです。私どもは、別に私がそそのかしたわけではないけれども、転向しなくても日本の法律になんら触れてないんですから、かれは無罪であるという主張をしたかったわけですが、われわれの力がまだ足りなくて、やっと七年の刑というところになりました。ただ額面どおり七年といいますけれども、結局、徳川時代みたいに、おとうさんが罪を犯すと、その家族まで一網打尽にあげられてしまって、台湾の中の政治犯というのは、いま台北近郊に一万人ぐらい入っているわけで、そういう人たちは普通の犯罪者でなくて、みんな政治犯で、全部やみからやみに葬られて、ここのところ、マスコミの大きな. 騒ぎになったのが二十年間に五つぐらいの事件です。ですから陳君の事件は、マスコミを騒がせた柳文卿さんの次の事件なんです。

それで私はあまりにたくさんの材料があって、どういうふうに結んでいいかわかりませんけれども、入管局長はこの間、八月五日に法務委員会で猪俣さんが二時間ほど食い下がられたときに、陳君は自分の費用で帰ったんで、一度台湾に帰ったならば、また法政大学に入りたいという申請をすれば、いつでも入れてあげるというふうなことを言って逃げておりました。それで猪俣さんが、あなたは死刑になるということをご存じですかと言ったら、そんなこと知らない、法務大臣は生命の危険のあるところに送り返さないと言っている。しかし実際には生命の危険のあるところに帰したではないかというようなことを言うのです。それであの手この手でたくさんの抗議をしたものですから、あるいは私がベ平連に来て何でもかんでもぶちまけるかもしれないから、結局その前に減刑しちゃったほうがいいと思ったんですね。ベ平連は人権問題のメンソレタームみたいな特効薬になっているんでしょう。きのうの朝、何かしゃべられる前に死刑というと大変なととだからと思って減刑してくれたのかもしれません。

▼政治亡命とわれわれ

ですから、私は陳君のことに関するかぎり、陳君が非常にあこがれていた「毛沢東語録」の効力より、小田実さんの語錬のほうがききめがあったと思うんです（拍手）。そぅいう名誉あるベ平連の名において、われわれは、日本政府は公式にはかれを政治犯で送りましたと言えないという矛盾を突きまして、日本人民の手にかれを取りり戻したいと思うのです。第二、第三の陳玉璽が出ないように、われわれはほんとうに真剣になって、政治犯の亡命のことを考えたいと思います。

それでいろいろな提案がありますけれども、きのうからがらりと状態が変わったために、私どもがここに提起していたものが全部古くなってしまったために、台湾の法律というものは死刑が突然に七年になったりして、一生懸命値切れば値切ってくれるんだということに自信がつきましたから、この大会の名において、どうか陳玉璽がもし日本へ来たいと言えば、再入国を認めるという許可をみんなの名前において要求していただきたいと思います。それを獄中の陳玉璽が知ったとき、ほんとうに、日本の植民地政策で非常に苦しめた台湾人との問題がまだ解決していないものですから、私たちは、そういう日本人としての連帯感を多くの台湾人に伝えることができると思うのです（拍手）。

（小田実・鶴見俊輔編『反戦と変革』1968 年、学藝書房より）

■陳玉璽救援

ペンを折るわけにはいかない

川田泰代

1968年2月10日。陳玉璽が、入管に抗議して壁に頭を打ちつけて鮮血で「毛主席萬歳」と血書して自殺を計ったときの血染めのセーター

陳玉璽は 29 歳の冬から、33 歳の秋まで、「国府」当局によって、逮捕、拘禁、投獄されていた。青春の終わりから壮年にかけて、人生のもっとも稔り多い時代に、3年8カ月、完全に自由を奪われ、社会から断絶させられていた損失は大きい。

1971 年 10 月 25 日の朝、陳玉璽は奇蹟的に「国府」蒋介石総統の特赦をうけて、他の 40 名の共産主義的傾向の政治犯と共に釈放された。骨と皮ばかりに痩せおとろえた彼は、明らかに神経疲労の極みに達していた。彼は禁固 7 年の刑期の半分で釈放されたのだが、特赦という奇蹟が行われなかったなら、彼の生命は到底、もう一夏持ちこたえることはできなかったことであろう。

本書の題名を“良心の囚人”としたことに、わたしはいささか違和感を持っている。彼は確かに、思想、信条の自由を「国府」に問われたそれではある。だが、蒋総統は世界世論に答えて、陳玉璽を釈放した。わたしはその国際感覚を高く評価しないわけにはいかない。たとえ、国連での椅子を奪われないための政治ショウであっても、釈放された政治犯は自由になったのだ。わたしは、陳玉璽事件と題して特に訴えたかったのだ。

陳玉璽の場合、本書にくりかえし数々の証言をしていることからみても明らかなように、彼は日本政府によって、捏造された政治犯である。そうしておきながら、法務大臣も入管局長も、おきれい言を並べたて、その誤りを訂正しようという一片の良心も示さなかった。中国人の本当の心情を汲みとろうともしないで、野犬狩りの狂暴さで片付けたやり方は、帝国主義下のアメリカにも通用しない残酷な行政措置である。

「日本政府は責任をとれ！」

わたしたち日本人には、まだこのことの問が果たされていないのだ。「釈放されれば、陳玉璽事件は終わりさ！」。そうして、彼の名前さえも日々に忘れされて行く。

「日本人は陳玉璽のために何をしたのか？」

わたしとて、それは充分なたたかいではなかった。永い永い慟哭の時であった。だが、その涙は今も。すこしも乾いていない。

不自由なたたかいにされ加えられた数々な妨害。それはあたかも釣魚台に糧を求めて集まる台湾の漁民を実弾をつめたピストルで追い散らす沖縄の警察と、見てみないふりをしている多くの日本の政党・マスコミに等しい。日本の領土だと、手前勝手な理屈をつけて、反中国、再侵略をする考え方。事件を異にしても、陳玉璽事件の底に流れている日本帝国主義の残存であり、勃興である。そのことへの反省のためにも、わたしはペンを折るわけにはいかない。　（後略）

『良心の囚人　陳玉璽小伝』（亜紀書房）の「あとがき」より

無名の者への救援成功を喜ぶ

ジョン・E・ライネック
（ハワイからのメッセージ）

川田泰代著『良心の囚人　陳玉璽小伝』　巻頭文

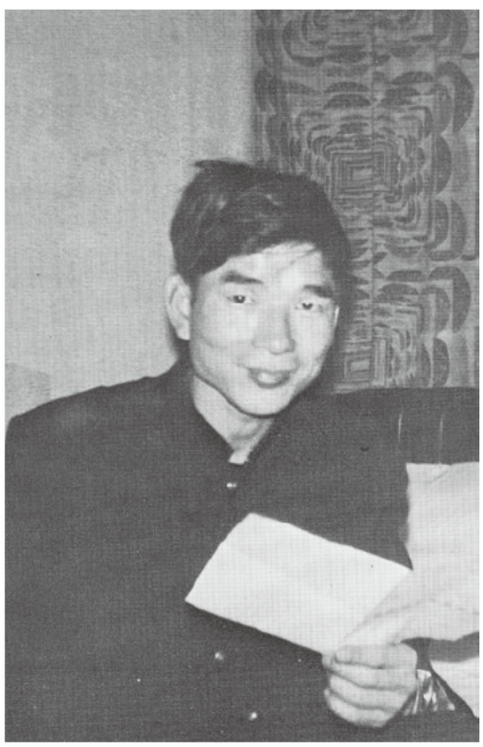
台湾出身の若い学者である陳玉璽君は、世界各地における彼の友人の支持者の３年半にわたる運動の後、昨年特赦されましたが、彼は彼の立派な仁学とすぐれた知性を愛したごとく身近の友人にしか知られていない単なる無名の人でした。学問的名声や有力な家族あるいは政治的な影響を通して支持を得るということは不可能でした。

それ故にこそ、保守的な人、急進的な人、有名人、無名人を問わず各階層の人々が「同情」という同じきずなに結ばれて、陳君の釈放に参加したことは喜びあまるものがあります。

陳君の自由を得るための運動をおこすと共に、陳君の強制送還並びに投獄に関し、自らの政府に対して問題を提起した陳君の日本の友人たちに私たちは特に負うことがあります。

また、陳君以外の多くの人々をも残酷に取り扱った圧政的な入管体制を改革するための闘争に対して、私たちは日本の友人たちに拍手を送ります。

（1972 年７月）



陳玉璽。日本人民との連帯を示すために学生服を着て撮す。1968 年２月（川田泰代著『良心の囚人　陳玉璽小伝』より）

われわれ自身の闘争

リチャード・O・ワダ
（ハワイ　東西文化センター　陳委員会委員長）

川田泰代著『良心の囚人　陳玉璽小伝』　巻頭文

私たちの学友がその信念を実行して投獄されたことは、ここハワイにおいて重要な意義をもたらしました。日本入管当局及び台湾政府役人による彼の台湾への強制送還がいわゆる「陳事件」の発端ではありません。また、ブラウン大学において奨学金を得たのにもかかわらず、東西文化センター総長の再三にわたる問い合わせにもかかわらず、陳君のパスポートの延期が避退されたことに始まるものでもありません。

それは、陳君が彼自身の信念を実行している時に始まったのです。それは、彼が大学の図書館で本を読んでいる時、その読んだ本の内容に関して台湾本国へ報告された時に、すでに始まっていたのです。

ここアメリカにおいて、特に東西文化センターにおいては、各自の意見を自由に交換し、「真実」を追求することが奨励されています。学問及び思想の自由は、この機関（EWC）創立の基でもあります。本国の政府がいかに制限をおしつけようとも、この自由は否定されてはなりません。陳君の釈放運動は同時に、この基本的自由を守り、確立するためのわれわれ自身のための闘争でもありました。私たちのこの闘争を通じて、陳君並びに他の在日外国人が日本入管当局によって陳君同様の非人道的な扱いをうけたことも知りました。

この意味において、「陳事件」は彼の刑務所からの釈放で終わったわけではないのです。共に闘い続けましょう。

（1972 年 7 月）

適格な人による適切な書

猪俣浩三

（アムネスティ国際委員会日本支部理事長）

川田泰代著『良心の囚人　陳玉璽小伝』　巻頭文

私が衆議院の法務委員をやっていたとき、川田泰代さんが、陳玉璽の強制送還事件につき私に訴えてきた。私は当時入管問題につき社会党の主任であったから、川田さんからいろいろの資料を貰って法務委員会で入管局長や法務大臣に質問した。その内容は本書に詳しいから省略する。陳君の事件後やはり台湾人の日本留学生柳文卿君の強制送還があり、時あたかも入管法の改正法律案の審議中であったので入管行政のあり方に対する批判として川田さんから詳細な資料を貰い、これも委員会で政府当局に対する糾弾的質問をした。

私は１９６９年９月、フランスの議会から紹介を受け日本の衆議院代表として彼地に渡り後アメリカを経由して帰国したのであるが、私がワシントンの飛行場につくと私の知らない数人の人から出迎えを受けた。これはエール大学の教授を中心とした中国人であった。私は川田さんの交際の広いのに驚いた。このエール大学の教授が私をワシントンのアムネスティ・インターナショナルの事務所に案内した。私は事務所の人達からいろいろ説明をきき、パンフレットを貰い、彼等の要望に答え日本に支部をつくる決意をしたのである。ワシントンから各地を経て最後にハワイにいったのであるが、ここでもハワイ大学の学生１０数名が私を迎えてくれた。彼等はハワイ大学出身の陳玉璽君のことについて大学の総長あての陳君救援の活動をすることを要望してくれとのことであった。私は彼等と共に翌日総長にあってこのことを強く要望した。総長も快諾してくれた。この大学には日本人も３０名ばかり留学しておったが私は食堂で彼等と会食しながら陳君のことを訴え協力を求めた。私は後日聞いたのであるが、私がハワイを出発した日の晩、学生５０～６０名が日本領事館にデモをかけたそうである。これは領事館はじまって以来のことらしい。

陳君は、本書に詳細に書いてあるように、川田さんをはじめアメリカの国会議員までの協力を得て、死刑が７年の懲役になり、目下保釈となっている。彼は保釈後、私に詳細な手紙をよこした。それによると、東京入管に呼び出されその夜身柄を収容されたのであるが、その際入管職員から大変な暴行を受け負傷したことを訴え、彼等のやり方に憤懣やる方なく後日のために彼等を告訴してくれと委任状まで添えて訴えてきた。私は川田さんや、陳君の同僚諸君とともに懇談したが、陳君は保釈の身といえ、きびしい監視の眼が光っているに違いないし、日本の入管当局と台湾政府の関係も考え当分静観し、後日の機会を待つことにしたのである。川田さんはアムネスティ国際委員会日本支部の生みの親であり、現在最有力の理事である。

本書は、日本の入管行政のあり方を知る上に適格に人による適切な書である。

（1972 年 7 月）

■陳玉璽救援

人権に対する清冽な意識

宮崎繁樹（明治大学教授）

川田泰代著『良心の囚人　陳玉璽小伝』　巻頭文

川田泰代さんが、この『良心の囚人』という本を書かれた、という話を聞いて、すぐにでも手にとって見たいと思いにかられた。川田さんを知っておられる方なら、誰でも、この数年、彼女が陳玉璽事件に注いできた誠意とそのなみなみならぬエネルギーを思い起こされぬ方はあるまいと思う。この本は、そのいきさつを、彼女が、一人の前途ある台湾青年の人権を守る運動に引き込まれ、その中核となっていったいきさつを、残り少なく描き出している。

「呪われた記憶の日」から「人間としての尊厳のために」にいたる本書の行間ににじみ出る著者の人権に対する清冽な意識は、読者を事件の核心の中に引き込み、著者と共に問題点を考えさせずにはおかないだろう。

一人の若者が正義に生きようとしたために、権力によって闇から闇にほうむり去られようとした時に、日本、アメリカ、「台湾」、中国に済む善意の人びとが手を組んで、その若者を救うために立ち上がった身近な歴史を、この本は綴っている。

この本は、国際的人権ののろしを掲げて、鉄柵の中で助けを求めている政治犯の人々の救済を目ざす、アムネスティ・インターナショナルの精神と軌を一にしている。

著者の川田さんがアムネスティと出逢い、その活動にも参加していくようになったことも偶然ではないように思われる。

ユネスコ憲章は「ここに終わりを告げた恐るべき大戦争は、人間の尊厳・平等・相互の尊重という民主主義の原理を否定し、これらの原理に代わりに、無知と偏見を通じて人間と人種の不平等という教義をひろめることによって可能にされた戦争であった。政府の政治的・経済的取りきめのみの基づく平和は、世界の諸人類の、一致した、しかも永続する誠実な支持を確保できる平和ではない。よって、平和は、失われないためには、人類の知的及び精神的連帯の上に築かなければならない」とのべている。

わたしは思う。本書の著者のような人こそが、言行の一致した、人権の平和の使徒でありうるのだと。孫文百年祭の事務局長もつとめた彼女のたしかな国際感覚と人権の意識は、事件の明快な分析を読者の前に展開しているので、これ以上わたしが述べることは蛇足となってしまうだろう。

本書には、陳玉璽事件と関係ある柳文卿事件、劉道昌事件、劉彩品事件などにも言及し、知られていない台湾・中国問題の側面にもふれている。わたくしは、とくにこれからの日本をになう若い人たちに、是非この本を読んでいただきたいと思う。

（1972 年 7 月 7 日）

■陳玉璽救援

川田さんのこと

中村敦夫
（俳優）

川田泰代著『良心の囚人　陳玉璽小伝』　巻頭文

中村敦夫（写真左）＝1988 年 7 月 10 日

1968 年初夏のある日、アメリカの友人から 1 通の手紙が届いた。それは、私と同じ時期にハワイ大学に留学していた陳という青年が、在日中に日本政府によって台湾に強制送還され、生命の危険にさらされているので、日本で出来るだけのことをしてくれ、という要請であった。手紙で会うようにと指定された法政大学の中村哲先生を訪ねると、先生は川田さんのお宅へ私を連れて行って下さった。

これが私と川田さんとの出会いであり、また、陳玉璽事件を通して、無知だった私が多少とも、非人道的な入管体制の内実を知ってゆくきっかけであった。その後、「陳君を守る会」ができ、私も発起人として名を連ねることになるが、陳君を最悪の状態から、とにかく今日の条件にまで救い出したのは、終始一貫、執拗に釈放運動に心身をささげてきた川田さんの努力以外のなにものでもない。また、自らの驚異的な抗議のハン・ストによって、入管当局の弾圧を粉砕し、滞在ビザを勝ち取った劉道昌君を私に引き合わせ、私にアジ・プロ劇「中国から来た青年」の上演を決意させたのも川田さんであった。

川田さんの活動は多方面にわたり、スピーディーでダイナミックである。自分にとって中国とは何かということを掘り下げてみてからでなきゃと、先ずは自己否定作業に忙しい若者達を尻目に、このダンプ・オバサンは、神経の弱い理屈屋には無節操にも思えるほど、利用できる現実的なものは凡て利用して突き進んでゆくのである。その雑然たるエネルギーが、事実、正しい力となって効力を生み出すのは、豪快な川田さんの表面からは想像できぬ、こまやかで鋭い感受性に裏打ちされているからだ。

陳玉璽事件は、差別主義者、抑圧民族としての日本国家の実態を暴露しただけでなく、「台湾」、中国、日本、アメリカの、どす黒い政治のかけひきの中で、いかに個人の生命が手軽く犠牲にされてゆくかを知るための重要な手掛かりである。そのことを、川田さんの著書は、あますことなく解明してくれるだろう。

（1972 年 7 月 1 日）

■中国との絆

川田泰代と中国

楊　国光（元中国新聞社東京支局長）
訳・柴田　巌（千葉工業大学専任講師）

一九八〇、九〇年代、記者として東京に常駐していた頃、私は大勢の日本の友と付き合ったが、なかでも忘れ難いのは、高名なベテラン記者で社会運動家でもある川田泰代女史、その人である。川田女史は日中友好人士として、日本に駐在する中国人ジャーナリストのために、常に取材の橋渡しをして下さった。私たちが日本社会の各層と深く接触することができたのは、そのおかげである。特筆すべきは、彼女の剛毅で正直な人となりが、中国の同業者の尊敬の的だったことであろう。

★川田と緑川英子

川田泰代は１９１６年、インテリの家庭に生まれた。彼女が物心がついたとき、父川田友之は東京で大観社書店を経営し、英語版の『世界年鑑』を出版していた。川田女史の記憶によれば、父親は若くして家族とともに台湾へ渡って、進歩的思想に染まり、孫文先生とその革命に傾倒、他に先駆けて『三民主義』を翻訳・出版したという。聡明な川田泰代が幼ない頃から孫文が中国の傑物であることを知り、敬慕するようになったのも自然の成り行きであった。

1960年10月１日、天安門前。ジャーナリスト代表団として中国を訪問。左から３人目が川田泰代さん

１９３７年、東京女子大学を卒業した川田泰代は婦人画報社に入社、記者人生の第一歩を踏み出す。この年は、満１９歳になったばかりの彼女にとって波乱の一年であった。ときは「蘆溝橋事件」前夜、日本上空にはどす黒い戦雲が立ちこめていた。折も折、うら若き川田泰代の身辺で、その後の彼女の生き方に影響を与えた、いわゆる「叛逆事件」が発生する。遠縁の親戚に当たる長谷川テル（１９１２－１９４７）が日本を飛び出し、抗日戦争の隊列に一身を投じたことがそれである。

長谷川テルは、中国で「緑川英子」と名乗った日本人エスペランチストであり、国際主義戦士であった。１９３７年春、渡華し抗日戦争（日中戦争の中国側呼称－訳者）に参加、郭沫若率いる政治部第三庁において日本軍兵士向けの反戦放送を担当した。日本降伏後は、夫劉仁と東北部へ行き、解放戦争に参加した。１９４７年、不幸にも手術中の感染症がもとで死亡、享年３５歳。遺体は黒龍江省の佳木斯（チャムス）烈士陵園に葬られた。

親族関係から言えば、長谷川テルは川田の父親の従姉妹に当たるものの、年齢的には５年上に過ぎなかった。テルは足繁く彼女の家を訪れたし、二人は大の仲良しであった。しかしテルは中

国行きの計画について川田に漏らしたことはなかった。おそらく川田のことを、学校を出たての政治に疎い文学少女と見、口に出かかった話をぐっと飲み込んだのであろう（「現代日本婦女列伝」）。

川田泰代が『都新聞』紙上で、写真入りの衝撃的なニュースを目にしたのは、それから一年後であった。緑川英子という「嬌声売国奴」「赤くずれ」とは、長谷川テル本人にほかならなかった。

〔訳者注〕いわゆる「武漢三鎮」（武昌・漢口・漢陽）陥落後の１９３８年１１月１日、『都新聞』（現『東京新聞』）は「『嬌声売国奴』の正体はこれ　流暢・日本語を操り怪放送　祖国へ毒づく　『赤』くずれ長谷川照子」との大見出しを掲げ、同地での執拗なる反戦放送に従事していた日本人女性の正体が長谷川テルであることを暴露した。以下は同記事の一節であるが、日本軍がいかに彼女の反戦放送に頭を痛めていたかがよく分かる。テルの反戦活動の一端については、拙稿「長谷川テル研究－日中戦争期・中国における反戦活動の軌跡－」（『千葉工業大学研究報告人文編』第三五号、１９９８年）を参照されたい。

「漢口陥落直前まで漢口放送局のマイクから流暢な日本語で激越な反日デマ放送をしていた日本女性の声が連日聞こえてきたことは既報したが、この祖国日本に弓を引く覆面の売国奴女性の正体が武漢陥落と共に判明、……奈良女高師中退の長谷川照子（２７）で、かつて“赤”の“女闘士”として暗躍中に中国留学生と“赤い恋”に結ばれて渡支したものである。本年２月上旬突然香港放送局から女の戸で反戦演説が行われた。然もそれが歯切れのいい流暢な日本語である。この放送を耳にした誰れもがマイクの前に起つ覆面の日本女性は何者だろうと深い疑問を抱き当局でもその正体を突きとめるため、躍起となったが皆目判らなかった。次いで広東に現れて何回となく放送は繰り返されたのだ。今夏、わが無敵皇軍が漢口攻略の火蓋を一斉に切るや今度はこの怪放送が漢口を舞台として毎夕行われ、日本軍部の誹謗、日本経済に関するデマが紅い唇に載せて毒づき始めた。……」

川田泰代は頓悟した。テルはもともと反戦主義者であり、戦争に反対するために日本を脱出したのだ、と。川田の心は激しく揺さぶられた。天地は軍国主義の宣伝で覆われていたが、彼女は時世に迎合することはなかった。このときの彼女はすでに自らの頭で考え、しっかりと自分の考えを持った女性に成長していたのである。

１９４５年８月１５日、日本が降服、翌年、極東国際軍事法廷が開廷し、東条英機、土肥原賢二ら主要戦犯が裁かれ、南京大虐殺などの真相も続々と白日のもとにさらされた。川田泰代もファシズムの残虐な本質とそれがアジア、とりわけ中国にもたらした悲惨を明確に認識するに至る。

川田がテルを語るとき、そこにはいつも深甚なる敬意が込められている。彼女はテルの脱出について、「彼女は大きな歴史の流れを、正しく方向づけて生き、たたかい。そして若くして命を中国東北地区で失った」と述べ、テルと我が身を引き比べて「自分の無知が恥かしい」（「長谷川テルの足跡をたどる」）と言っているが、若き日、父親の薫陶を受けた川田女史が中国へ視線を向け、その革命の動向に注目するようになったのは、これを機としている。

川田泰代は真理を追求する女性である。朝鮮戦争が勃発した１９５０年、三児の母親だった彼女は夫と離婚する。以前、「このことで、まる１０年苦しんだわ。問題に対する見方、考え方がまるっきり違ったので、意見の衝突が増え、溝が深まったの。例えば朝鮮戦争のときだって、夫は

戦争で一儲けしようとし、私は反対の態度を採ったの。こうして私たちは別々の道を歩くことになったというわけよ」と、悲しそうに打ち明けてくれた。離婚後、川田女史は薄給で、苦労しながら子供を育て上げた。

貧者と弱者を憐れみ、虐げられるか弱き者のために一肌脱ぐ、これが川田泰代の性分である。長女は父親側に引き取られていたが、大学に合格しても、前夫とその両親は入学を許さず、「女児に学問は不要」と言うばかりであった。その娘のために保証人となり大学へ進学させたのは、親権を有さぬ川田の方であった。かつて彼女が意味深長に「旧い観念を打ち破るのは至難の技なのよ」と語るのを、私は聞いたことがある。

１９６０年、川田泰代は小林雄一氏を長とする日本ジャーナリスト会議代表団の一員としてオーストリアで開かれた第二回世界ジャーナリスト集会に出席、代表団は続けてソ連と東欧各国も歴訪した。

その後、代表団は招かれて訪華し、国慶節などのイベントに参加した。中国人民が建国からわずか１０年余りでなし遂げた成果は、彼女に深刻な印象を与え、中国に対して好感を抱かせた。

冷戦はピークに達していた。日中間の国交はいまだ正常化していなかった。「赤」のレッテルを貼られ、罵声のなかを社会主義国家を訪問することは、当時としては大変な勇気を必要としたし、一定の犠牲すら払わねばならなかった。果たして川田泰代は帰国すると、長年勤務した婦人画報社を解雇された。しかし彼女は驚ろかなかった。こうなることは予期していたからである。彼女は上司に向かって「私はただの代表団の一員です。何をそんなに慌てふためいているのです！」と言うや、憤然として会社を後にした。

★台湾進歩青年を救出

１９６８年２月のある日、東京の法政大学博士課程へ入学準備中の台湾人アメリカ留学生陳玉璽（２９歳）が法務省出入国管理局において逮捕され、台湾へ強制送還された。台北警備総司令部の獄舎につながれた彼は軍法處の審判を待つ身であったが。その結末が極刑であることは誰の目にも明らかであった。この逮捕劇が露顕すると、政治事件として世間を一時騒然とさせた。

事情はこうである。半年前、当時（ハワイ大学にいた陳玉璽がベトナム反戦デモに参与した廉で台湾当局から帰国を命ぜられた。彼は帰国の途上、東京に立ち寄ったが、華僑の友人の紹介で居候したのが、ほかならぬ川田泰代宅であった。

川田はこの青年と一面識もなかったが、彼の置かれた境遇を知ると、日本によるべなく、また日本語も解さず、幸不幸の定まらぬこの台湾青年に、毅然として救援の手を差し伸べた。日本の諺「窮鳥懐に入れば猟師も殺さず」、彼女は自分の好きなこの諺に従ったわけである。

１９６６年、孫文先生生誕百周年に際して、川田泰代は日本の孫文先生生誕百周年記念事業委員会事務局長を務めた。彼女の仕事ぶりは情熱に溢れ、いい加減なところは少しもなく、全員から絶賛された。彼女は頼りになる、知られた対華友好人士であった。彼女は陳玉璽が台湾当局の「ブラック・リスト」に載っている事実をつかんだ。とすれば、日本社会でも問題になりかねない。とはいえ、川田の名は対華友好人士として知られており、自らが保証人として表に出るわけにはいかなかった。そこで、高名な弁護士である宮崎竜介氏に、彼の滞日中の身元保証人になってくれるように頼んだのであった。付言すれば、宮崎竜介氏は宮崎滔天の長男である。宮崎滔天（１８７１－１９２２）は日本の浪人で、若き日、自由民権思想の影響を受け、侠客の風格があ

った。彼が日本で孫文の知遇を得たのは一八九七年のことである。２０世紀初頭、恵州起義（台湾総督児玉源太郎および民政長官後藤新平から支援の約を得た孫文は１９００年、広東省恵州における清朝打倒の挙兵を画するも、あてにしていた日本からの武器弾薬が届かず蜂起に失敗。この際、宮崎滔天は孫文に懇願され、武器仲介の役を担っていた――訳者）の企てに参画し、孫文の革命活動と同盟会の革命主張を日本に紹介、革命党の黄興、宋教仁、章太炎らとも親交を結んだ。１９２１年、辛亥革命後に孫文に随って南京へ行き、臨時政府成立式典に列席、主要著作に『二十三年之夢』などがある。それゆえ宮崎竜介氏も台湾国民党の最上層部と関係深く、過去、台湾側から「国賓」として何度となく訪台の招待を受けだが、「健康上の理由」で果たせずにいた。

陳玉璽の逮捕・失跡は川田泰代を驚愕させた。彼女は自身の長年の経験から、戒厳令下の台湾に民主、人権がないことを察知していた。陳玉璽の将来は絶望的であった。唯一、効果が期待できるのは、国際社会の世論と関心を喚起することである。とはいえ、当時、中国は「文化大革命」の渦中にあり、それは川田にとって、決してたやすいことではなかった。「どうせ彼は台湾人なんだから……」「スパイかも知れないし」などと、この件に関与しないよう忠告してくれる親切な友人もいた。

しかしながら、川田泰代はそれに耳を貸さず、「台湾人だって中国人じゃないの」と公言して憚らなかった。人々が最終的に自分を理解してくれるものと固く信じていた彼女は勇を奮って一人、こちらからあちらへ、またあちらからこちらへと訴えに駆けずり回り、ついに事件発生から四ヵ月後、「陳玉璽君を守る会」の結成を見たのであった。彼女は社会的名士に「守る会」の世話人を依頼し、宮崎竜介、法政大掌総長中村哲、評論家高木健夫、東京大学教授石田雄。人気映画俳優中村敦夫氏ほか、諸氏が名を連ねた。

これより早く、救援の隊列に加わったのが、当時社会党の国会議員であった猪俣浩三氏である。氏は率先して国会の場――衆議院法務委員会を利用し、当局の国際法違反と人権を踏みにじる卑劣な行為を弾劾した。陳玉璽の母校であるハワイ大学でも、進歩的な教員と学生が川田女史の支援を得て、繰り返し抗議デモを展開した。

川田泰代は、自著『良心の囚人』にこう書いている。

> 「わたしには二人の成人した娘と息子がある。その息子たちと比べて、彼（陳玉璽を指す――訳者）は数段すぐれた青年である。実質的には、たった２ヵ月余りの保護期間であったのだが、あれから、数年間、わたしが彼にそそいだエネルギーは、わたしの２人の息子と、すでに結婚して、一女を生んだ娘とに捧げた母親としての３０年に余る養育の苦労を、遙かに上廻ったものであった」

偶然知り合った青年に対する愛情について、川田泰代は自著のなかで「無宰の青年の不幸な境遇を見るに忍びなかった」と記しているが、さらに重要なのは「本件は私にとって、いまだに清算されていない戦争責任の問題と無縁ではない」「侵略戦争及び植民地の民衆に対する弾圧」を一人の日本人として永遠に忘れることはできなかった、と心の内を表明していることである。

１９６８年８月、台湾軍事法廷は国際社会世論の圧力下で、陳玉璽の死刑求刑の変更を余儀なくされたものの、いわゆる「懲治叛乱条例」に照らし、被告が滞日中に中国共産党系の華僑新聞「大地報」に協力したことを取り上げ、動乱煽動罪で禁固七年の刑を言い渡した。しかし川田泰

代はそこで立ち止まらず、関係方面に圧力を加え続けると同時に、台湾と共謀した日本の入管当局の法的責任の追及に乗り出し、これによって運動を深化させたのであった。結局、台湾当局としても３年８ヵ月服役させた陳玉璽を、刑期満了を待たずに「恩赦」で釈放せざるを得なかった。

出獄後、陳玉璽は渡米し、一家揃ってニューヨークで暮らす。彼が川田泰代ら昔日の命の恩人を東京へ訪ねたのは１９８８年のことである。主客ともに感極まり、感動的な再会であった。ただ唯一の心残りは、川田と手を携え、全力で救援活動に当たった宮崎竜介氏が、すでに鬼籍に入られたことであった。

〔訳者註〕「陳玉璽事件」の顛末については、川田泰代『良心の囚人－陳玉璽小伝』（亜紀書房、１９７２年）が、克明にその経緯を伝えているが、参考までに、陳玉璽氏の略歴ならびに「事件」の大まかな流れを、以下、年表風にまとめておきたい。

１９３９年

１月２日	日本統治下の台湾に下層中農の子として生まれる。

１９６４年

９月	ハワイ大学東西文化センター（修士課程）に留学。在学中、ベトナム戦争が勃発し、反戦運動に関与。

１９６７年

６月	台湾当局より帰国命令。
８月１７日日	２ヵ月有効の観光ビザで来日。
９月中旬	１１月初旬まで約２ヵ月、川田泰代女史宅に起居。
秋	訪台した法務大臣、入営局長と台湾要人のあいだで、台湾側が在日中国人麻薬犯らを引き受けることを条件に、日本政府が台湾への在日中国人政治犯の送還を約した「日台密約」が交わされる。

１９６８年

１月８日	日本での学業継続を希望する陳氏のため、川田女史の要請に応じた宮崎竜介弁護士が身元引受人となり、東京入管事務所へ特別在留許可を申請。
１月２３日	入管の指示どおり、特別在留のための身元保証金１０万円を納付。２月末までの仮放免が決定。
２月８日	入管事務所から呼び出され、出頭したところ、強制収容さる。
２月９日	政治犯の強制送還を禁じた国際慣習法を無視した入管によって、羽田空港で台湾側へ引き渡される。逮捕され、保安司令部に留置。陳氏が突然姿を消したことを不審に思った川田女史、単身、真相究明に乗り出す。支援の輪は日本のみならず、（ハワイ、アメリカ本土へも広がる。
４月１９日	衆議院法務委員会において、猪俣浩三議員の質疑に対し、入管局長が「出国は本人の自由意志による」と虚偽の答弁。
６月	台湾当局による死刑求刑。
６月２４日	川田女史の呼び掛けで、「陳玉璽君を守る会」結成。

■中国との絆

８月１０日　　禁固７年の判決下る。この後、ハワイを中心に釈放要求運動が高まる。

１９７１年

１０月２５日　　「恩赦」により釈放。

★中国再訪の願い

川田泰代は老いて我が子を喪う悲哀を味わう。数年前、不治の病に冒された長女に先立たれたのであった。しかし、悲しみをこらえて野辺の送りを済ませた川田は、以前と変わることなく再び社会活動に挺身した。筆者の東京常駐中、彼女の紹介・同行で、中国人記者は東京目白の宮崎滔天の旧居や九州熊本の宮崎三兄弟資料館。福岡壱岐島にある日本の「電力王」松永安左衛門記念館、尾崎秀実――ソルゲ事件記念集会、徳田球一記念会など、バラエティーに富む取材活動を行うことができた。近年は、中国人留学生のあいだで川田女史の姿を見かけることも少なくない。

川田泰代はその知名度の高さと情熱をもって、日中友好の発展のために、たゆむことなく尽力した。我が国の駐日大使館が早くから彼女を賢賓としているのはそのためである。彼女は苦労を厭わず何度も日中両国を往来した。６名からなる訪中団とビデオフィルム撮影隊員を引き連れ、東京からはるばる佳木斯に出向き、２年前に郊外の小高い丘の上に建てられた緑川英子の墓に参り、ハルビンの東北烈士記念館を参観したのは、１９８５年、古稀を越えてからである。帰国後、彼女は「長谷川テルの足跡をたどる」（本誌１９８５年９月号、８６年７月号連載――訳者）という長文の報告をしたためたほか、大小の講演会でビデオを放映し、東北の旅の紹介に努めた。

数十年来、川田泰代はこのように奔走してきた。８２歳になった彼女は筆者にこう語る。『目下、最大かつ最後の願いは、足腰の立つうちに、もう一度中国を旅すること、そのために毎日、鍛錬のための散歩を欠かさないのよ』。

朝日新聞社編『現代人名事典』の川田泰代の項では、彼女を「記者兼平和運動家」と評している。数年前、日中両国の老友が東京で一堂に会し、川田女史の誕生日を祝ったとき。このことが話題になると、彼女は口を開いた。「私の職業ねえ、記者と言っても、これまでお金になる原稿を書いたことがあるわけじゃなし、市民団体の指導者と言ったところで、ちっぽけな団体よ。要するに、私はものにならなかったということね」。彼女のユーモアたっぷりの発言に、満場笑いに包まれた。

すると、川田泰代の最大の理解者であるベテラン作家、宇佐美省吾氏がそれを打ち消すように声をあげた。「ものにならなかったですって！

川田先生は作家としても人間としても桁が違うんですよ。普通の『器』では収まり切らない！それに小説を２篇も書いておられるじゃありませんか！」

川田泰代は虚心坦懐、言行一致の人である。名利など彼女とは無縁らしい。ただ自分の信念に基づき働き、生きる、それが川田泰代女史である。

（１９９８年３月記）

■中国との絆

楊　国光（ヤン・グオクワン）氏　１９３２年、上海に生まれる。父は新中国初期、対日関係指導者として活躍した楊春松（ヤン・チュンソン）氏。３９年、父の仕事の関係で来日。日本の小中学校に学ぶ。５０年帰国。５４年旧ソ連へ留学し、国際関係学を専攻、６０年モスクワ國際関係大学卒。帰国後、商務印書館（６０－６３年）、外文出版社（６０－８３年）に勤務。８４年、中国新聞社駐日特派員として再来日、８６－９４年、同社東京支局長。現在、中国新聞社記者。共訳著に『松永安左衛門』（宇佐美省吾著、中国国際広播出版社）、近く、父親の革命家としての数奇な生涯を描いた『ある台湾人の軌跡－楊春松とその時代－』を露満堂より上梓予定。本稿は「川田泰代的中国情結」の題で、『回眸東京』（中国青年出版社、１９９９年）及び中国誌『視点』（中国新聞社、１９９８年９月号）に収録。

（月刊『状況と主体』２８０号、１９９９年）

「川田泰代的中国情結」　　楊国光　著

（「視点」　1998年9月号）

环球专递
VIEW POINT

川田泰代的中国情结

□ 杨国光

川田泰代（左五）、宇佐美省吾（左六）和朝日新闻记者吉田实（右二）与黑龙江省访日团合影。1990年摄于东京有乐町。

八九十年代，我作为常驻东京记者，结交过不少日本朋友。其中最令我不能忘怀的是著名老记者、社会活动家川田泰代女士。作为日中友好人士，川田女士经常为中国驻日记者采访牵线搭桥，使我们能较为深入地接触日本社会的各个层面；更主要的是她为人的刚毅和正直，赢得了中国同行们对她的尊敬。

川田和绿川英子

川田泰代于1916年出生在一个知识分子的家庭。在她开始记事时，她的父亲川田友之在东京经营大观社书店，出版英文版的《世界年鉴》。据川田女士回忆，她的父亲早年随家人去台湾，受到进步思想的影响而倾向孙中山先生及其革命。他也是最早在日本翻译出版《三民主义》一书的出版商之一。耳濡目染，使聪颖的川田泰代从孩提时代起就知道孙中山是一位中国伟人，对他十分景仰。

1937年，川田泰代从东京女子大学毕业并考入妇女画报社，开始了记者生涯。这一年对刚满19岁的她来说是不平静的一年。时值"七七事变"前夕，战争的阴霾笼罩在日本上空。恰在这时，在年轻的川田身边发生了日后影响其一生志向的一起所谓"叛逆事件"，即她的远亲长谷川照子的出走和投入中国人民抗日战争的行列。

长谷川照子，在中国用名绿川英子(1912—1947)，日本世界语者、国际主义战士。1937年春投奔中国参加抗日战争，在郭沫若领导的总政治部三厅担任对日军士兵广播工作。抗战胜利后，与丈夫刘仁到东北参加解放战争。1947年不幸在一次手术中受到感染去世，时年35岁。葬于佳木斯烈士陵园。

论起辈份来，长谷川照子还是她的表姑，但只比她大五岁。照子是她家的常客，她们两个人感情甚好，但她对川田却从未提过要去中国的事。也许照子当时认为她是一个刚走出校门的文弱少女，不谙政治，所以把到嘴边的话咽了下去(《现代日本妇女列传》)。

过了一年，川田泰代在日本《都新闻》上看到一条爆炸性的消息和配发的照片：这个名叫绿川英子的"娇声卖国贼"、"赤色败类"的不是别人，正是长谷川照子。

直到这时，川田泰代才恍然大悟，原来照子是一位反战主义者，她逃离日本是为了反对战争。此事对川田思想上的震动很大。尽管军国主义的宣传铺天盖地，但她没有随波逐流。这时的她已是一个善于独立思考、有主见的女子了。

1945年8月15日本投降。翌年远东国际军事法庭开庭审判东条英机、土肥原贤二等首要战犯，南京大屠杀等真相陆续为世人所知。川田泰代也终于认清了法西斯的残暴本质及其给亚洲尤其中国带来的灾难。

每每谈起照子，川田泰代都怀着深深的敬意。她说，长谷川照子的出走说明："她在历史的洪流中，能拔正方向并为此而生活与战斗，最后在中国东北地区献出了自己年轻的生命"。比起照子来，她"为自己的无知而感到愧疚"(《寻觅长谷川照子的足迹》)。早年受到父亲熏陶的川田女士，从此以后便把自己的目光投向中国并关注中国的革命。

川田泰代是一位追求真理的女性。1950年朝鲜战争爆发。这一年，

■評伝

川田泰代という女性（ひと）

渡邊澄子（大東文化大学名誉教授）

今、私は忸怩たる思いにとらわれているが、川田泰代という女性（ひと）も、陳事件も知らなかった。「陳玉璽君を守る会」が結成された頃はまだ社会への視野が狭く、関心も希薄でのほほんと過ごしていた。でも、小田切秀雄先生を介して中村哲先生には面識があり、優しい先生として尊敬していたが、研究者の道に進むことなど夢想だにしていなかった。小田切先生に勧められて研究論文などを書くようになったのは七十年代だったように思う。

研究のターゲットを大好きな夏目漱石に決めたが、そのとばロで、漱石には沢山の優れた弟子がいるが現代まで生々発展させて漱石を継承しているのは野上彌生子ただ一人であるという著名学者の説が首肯されていることを知って驚き、「將を射んとせばまず馬を射よ」から野上彌生子研究に的を絞って研究者の道を進み始めたのだった。野上彌生子は「強靭な写実性と理想主義的作風で注目」される作家として特等席に据えられていた。私はこの位置づけに不満だった。

1932（昭和７）年、千歌谷の自宅で家族と。後方中央が川田泰代さん

権力・金力を徹底批判した漱石は「創作家の態度」（０８・４）で、月は丸いと決めてかかるのは、「教育の結果、習慣の結果、ある眼鏡で外界を観、ある態度で世相をながめ、さうして夫（それ）が真の外界で、真の世相と思つてゐる」からで、四角も観る角度を変えれば「千差万別に見る事が出来る」のに、「見る角度が悉く一致」しているのは「規約の束縛を冥々のうちに受けて居る」ためで、「杓子定規」で見るのではなく、「世界は観様で色々に見られる」のだから「赤裸々な所を怖れずに」「客観に重きを置」くのがよいとの言葉に励まされて、大分県臼杵に二十回も通って調べ、彌生子は漱石を継承し得ていないことの論文化から研究者の道を進むことになってしまった。研究者の態度として、女性差別を内在させた男性による論がカノン化されていることにとらわれず、社会を視野におさめることを重要視し、規約の束縛から意識的に脱して自分の頭で考えたことを自分の言葉で述べることに努めた。

学生時代から光州事件、松川事件その他反権力運動に参加して連日デモや集会に出かけてはいたが、私はどうも書斎派で行動家ではないようだ。秋田の鉱山の長屋生まれの作家松田解子は自らを作家である前に足家だと足家であること自信し、弱者が犠牲になる事件の起きたことを知ると、借金で旅費を工面して飛び出し、自分の目で見たことを言葉で表現し、世の中に訴える言行

■評伝

一致の活動作家だった。百歳を半年後にした長寿を全うしたが、その一週間前までインタビューに元気に応じている。八カ月前まで出歩いている。九十八歳時の最後の講演は、全労連会館で開催の松川事件無罪確定四十周年記念東京集会であるが、そのひと月前に大館花岡に出かけている。九十九歳の２００４年の、私も出席した白寿を祝う会での、政権の右傾化阻止に闘えとの叱咤激励の大声はまだ耳の底にこびり付いている。

川田泰代も足が先に動く、行動の人だったらしい。私は彼女について無知で評伝など書く資格はない。かき集めた資料からの切り貼りによって彼女の業績を顕彰するしかない。多分、誤りもあるだろう。書き落としはさらに多いだろう。正確、詳細な川田泰代の年譜が書かれることを期待してやまない。

川田泰代による著書『良心の囚人　陳玉璽小伝』（１９７２・７・３０、亜紀書房）の奥付記載の川田自身による略歴には、次のように書かれている。

１９１６年生れ

１９３６年　東京女子大学卒業、雑誌婦人画報記者（結婚のため一時退社）

１９５０年　雑誌婦人画報に復帰　63 年同退社

１９６０年　第 2 回世界ジャーナリスト集会（バーデン）に参加、第１１回中国国慶節に中華全新聞工作者協会に招かれ参加、ソビエト、東ドイツ、ハンガリー、チェコスロバキアのジャーナリスト協会より招待、見学

１９６５年　インドネシアにおける外国軍事基地撤去のための国際会議に参加

１９６６年　孫文先生生誕百周年記念委員会事務局長

現在　婦人文芸同人、編集委員、アムネスティ国際委員会日本支部理事

これだけでは女性誌『婦人画報』の編集者が「世界ジャーナリスト集会」に参加し、国慶節に招かれたり、国際会議に参加したり、孫文生誕百周年記念委員会の事務局長や、アムネスティ国際委員会日本支部理事になっているのは何故か、疑問と興味を抱かざるを得ない。参看資料は少ないが『良心の囚人』はじめ関千枝子さんの『長い坂　現代女人列伝』（１９８９・７，影書房）、楊　国光（元中国新聞社東京支局長）さんの「川田泰代と中国」、「川田泰代さんを偲ぶ会」（２００１・５・２６）その他を頼りに川田泰代さんの人生の軌跡を素描してみたい。

川田泰代

１９１６年８月１２日　大阪に生まれる。父川田友之は東京で大観社書店を経営。英語版の『世界年鑑』など出版。この父は若年時、家族と共に台湾に渡り、孫文とその革命思想に傾倒して『三民主義』を翻訳･出版したという。

１９３７年　東京女子大学卒業後、女性誌『婦人画報』編集部に入社したこの年ははがき、封書の値上がりのみならず献金付きの愛国切手･はがきの発売、政権による挙国一致･国民精神総動員運動の要請、民間の十三女性団体が非常時局打開克服を目的として日本婦人団体連盟を結成と戦争へと加速されているが、既に日中戦争の発端となる盧溝橋事件（７・７）が起きていて、死者二十万超と言われる南京大虐殺事件（１２・１３）、これと表裏をなす労農派４００人余が検挙された第一次人民戦線事件（第二次は翌３８年２月）、早くも吉川英治・吉屋信子ら流行作家を特

派員とした戦地慰問が始まっている。

社会は戦時色が濃くなり、千人鉢や慰問袋作り精励が求められ、出征歓送歌「軍国の母」「進軍の歌」「露営の歌」が歌われ、内閣情報部による「愛国行進曲」募集など文化面でも軍国色が強まる波乱の年だった。この年の春、泰代の父の従姉妹で、泰代の五歳上で仲良しだった「緑川英子」と名のったエスペランチスト長谷川テル（１９１２～１９４７）が渡華している。彼女は抗日戦争に参加して、郭沫若率いる政治部第三庁で日本軍兵士向けの反戦放送を担当した。

私の中国体験は１９８７年、北京外国語大学に半年間客員教授として赴任したのが始まりだが、任期が終わって中国各地を経巡った時、長谷川テルが放送した地と説明されて感慨を深めた想い出がある。学生時代、世界共通語と知り、エスペラントを少し学んでもいて、長谷川テルの名は知っていたので。日本軍が武漢三鎮を占領（３８・１０・２７）した１１月１日の『都新聞』（現『東京新聞』の前身）が反戦放送を繰り返している女性が長谷川テルであると正体を報道した。仲良しだったテルが中国に行っていたとは知らなかった泰代は驚いたが、テルが反戦主義者であることは知っていた。泰代はテルの行動に衝撃を受けたが、軍国主義一色の時代への批判的思念はテルの命がけの反戦行動を知ったことで芽生えたように思う。テルにちなんだ私事を書いたついでに言えば、遠藤周作たちがサユリストを自称して夢中になった吉永小百合は泰代の姉の娘、姪であるが、私が大学教師になる前に勤務していた新宿駅近くにあった精華学園女子高の教え子だった。教え子といってもすでに売れっ子だったので月に一、二度位の出席だったために出席日数不足で卒業出来なかったが大検によって早稲田に入学し、卒業している。彼女は毎年八月に原爆の詩を朗読していることに感心して、原爆文学を広く深く知ることであなたの朗読は更に人の心をとらえるものになるだろうと、被爆作家を論じた拙著を送ってあげたら、手書きのなかなかいい返書が届けられた。

『婦人画報』入社一年半ほどといえば１９４０年だろうか。結婚退社して家庭の人に収まっていて、三児の母になるが。主婦時代１０年を耐えて５０年、離婚して『婦人画報』に復帰している。５０年と言えば朝鮮戦争、レッド･パージが始まり警察予備隊創設の年であるが、朝鮮戦争で特需景気に浮かれた年でもある。離婚について、「まる１０年苦しんだ。問題に対する見方、考え方がまるっきり違ったので、意見の衝突が増え、溝が深まったの。例えば朝鮮戦争のときだって夫は戦争で一儲けしようとし、私は反対の態度を採ったの。こうして私たちは別々の道を歩くことになった」と楊国光に語ったとあるが、関さんの本にも「十年間悪戦苦闘したが、ものの見方、考え方、すべて夫とくいちがってきた。」「たとえば朝鮮戦争、夫は戦争でもうける立場だったし、妻は戦争絶対反対だった」からと書かれている。

三児を置いて身一つで婚家を飛び出したが、娘が大学受験に合格したのに、夫だった父親もその両親も女に学問はいらぬと、入学を許さなかったことに怒った泰代は三人の上下二人を親権がなかったが引き取って大学に入れ、厳しい経済状況のなかで養育したという。『婦人画報』という一女性雑誌の記者だった泰代が小林雄一を代表とする日本ジャーナリスト会議の代表団の一員に選ばれた経過はよくわからない。選ばれるに値する目覚ましい記事を『婦人画報』に署名入りで書いていたのだろうか。オーストリアのバーデンで開催された第二回世界ジャーナリスト会議に出席し、この時続けてソ連、東欧各国を歴訪している。

初の外国旅行は楽しかったが、日中間の国交はまだ正常化されていなかった時代で“赤い代表団”と罵声を浴びたという。米誌にも中傷記事が載り、国を挙げての安保闘争のすぐ後だったこ

■評伝

ともあって『婦人画報』は泰代を『モダンリビング』の編集長に移籍させたがこれは左遷だった。６２年、娘が大学の建築科を卒業したが、建築科卒の女性に就職口はない。大学の先生から『モダンリビング』を推薦され、母娘一緒はまずいと泰代が退社することになった。その後の生活費取得手段はどうだったのかは不明。貯蓄があったのだろう。６６年から一年間、日本と中国との連帯で催された孫文生誕百周年事業委員会の父と孫文との関係から、事務局長役が回ってきた。中国は文革が進行中だったが、泰代は孫文を中国革命の父と尊敬していたので張り切ってこの役目を遂行した。

この事務局長の任によって人脈が広がったのかと想像される。以下は川田泰代によって書かれた『良心の囚人　陳玉璽小伝』から得た知識に負うところが多いが、６７年９月半ばから１１月上旬までそれまで一面識もなかった陳玉璽を居候させたのは、孫文の委員会で事務局長を務めた縁によったとある。二ヵ月ほど頼まれて事実上の保護者になったことがその後のアジアにおける政治犯「良心の囚人」（Ｃｏｎｓｃｉｅｎｔｉｏｕｓ　Prisoner の訳語で、思想、信条、言論、表現の自由を問われて、追放、逮捕、拘禁、投獄されていて、「世界人権宣言」にのっとって救出されなければならない人たち）救援活動に力を注ぐ平和運動家人生を歩ませることになる。この本には耳慣れない「国府」という用語が頻出する。国府とは国民政府のことで、陳玉璽の母国台湾の国民政府（１９５０～１９９６）で、１９４９年に台湾に移転してきた南京国民政府を再編成して成立した。

陳玉璽を襲った不条理で苛酷な事件を粗描しておきたい。陳玉璽は台湾の彰化県大有村の中農の家に生まれた（１９３９・１・２）が成績優秀だったので彼が７歳の時世を去った母の兄弟が主に学資を出してくれて台湾大学に進学した。大学でも抜群の成績でハワイ大学の奨学生試験に合格して東西文化センター（修士課程）に留学（数理経済学専攻）し、６６年、ハワイ大学で経済学修士を取得。彼の優秀さを見込んだ教授によってハワイ大学経済学部の助手を勤めるが、ブラウン大学博士課程の奨学生試験に合格、米国にそのまま留まってアメリカにおける経済学での三大名門校のブラウン大学で博士学位を取得するために留学滞在許可を国府に申請する。

ブラウン大学によって博士課程の交換留学生であることを証明する身分証明書もアメリカ合衆国国務省から給付されていたのに国府文部局から留学継続申請却下の通知が届いた。帰国命令は彼がベトナム反戦デモに出た事があったことで思想上の嫌疑だとすれば、帰国は入獄に直結する。そういう政情の時代だった。

去就に迷っていると日本にいけばいいと勧めてくれる友人がいて、６７年８月、観光ビザで日本に入った。パスポートは６８年８月までだったが期間更新によって１２月１５日まで有効となった。法政大学大学院で学ぶことを熱望した彼を、法政大学の中村哲、松岡磐木教授が後ろ盾になってくれた。この頃、泰代の家を出て、新橋の国際善隣協会の持ちビル善隣会館の三階の国費留学生用の後楽寮にいたと知り、驚いた。私は国際善隣協会会員である。講演を依頼されたことを機縁として友人から誘われて入会し、機関誌『善隣』にコラムの連載や論文を発表し、協会企画の日中友好の中国ツアーに参加したりと、現在進行形で関わりを持っている。会館の三階の後楽寮は現在も中国からの国費留学生の宿舎になっているという。中村哲先生とはお親しくさせて頂いた。川田泰代さんも陳玉璽事件も全然知らずにきてしまったが、今頃になって細い糸だが繋がっていたことに感慨を禁じ得ない。

台湾国府からの帰国命令を拒否した形で日本に来て、日本の大学に入ることが可能だったのだ

■評伝

ろうか、陳玉璽は在留資格更新のために東京入管事務所に特別在留許可申請を（６８・１・８）している、身元引受人が弁護士で宮崎滔天の息子の竜介（私は、柳原白蓮との関わりで竜介についても書いている）で、受け入れ側の法政大学の教授中村哲（間もなく総長）、松岡（当時経営学部長）による入管当局の要請に従った添書きを提出していて、東京入管事務所の呼出し（１・１５）で審査一課での面接を経て、入管当局の指示による特在のための身元保証金１０万円を納付して仮放免が決定されたのに、後でわかったことだが、少し前に法務大臣田中伊三次と入管局長中川進が訪台して国府の要人と、国府が在日中国人麻薬犯らを引き受けることを条件に日本政府が在日中国人の政治犯を送還するという「日台密約」が交わされていたことにより、それと知らずに２月８日午後１時、入管からの指示に従って東京入管事務所に出頭したところをいきなり強制収容され、翌日午前９時３０分のＣＡＬ機（蒋介石の息子が経営）で羽田から台湾に強制送還され着後直ちに逮捕、保安司令部に留置という想像を絶した暴挙が日本、台湾両国によってなされていたのだった。

治安維持法が闊歩した恐ろしい時代ではなく民主主義に根ざした人権確立の憲法下でこんなことがあったとは想像もできないが、身元保証金の１０万円も善隣会館の宿舎に置きっぱなし品々もそのままでの理不尽極まりない人権蹂躙の不当な強制送還がなされていたのだ。入管の人権蹂躙は２０２０年の現在も是正されていないようだ。１１月７日の新聞報道によると、長期間収容の外国人の速やかな送還を目指した入管法改正が議論されているというが迫害を怖れて逃げて来た人の強制送還は人権剥奪になるだろう。コンゴから逃げて来た女性は三度目の難民認定申請中に収容され４年超の長期収容で、悪いことしていない、動物じゃない人間だと抗議して男性職員に乱暴な扱いをされて自殺を図ったと言い、長期収容への抗議のハンガーストライキで餓死した例もあるなど、巷間では知られていない無法が今なお平然となされているのだ。

台湾はどうなのか。６８、６９年時代とは異なり、今は民主的な政府のもとで多様性が生きるダイバーシティ社会が築かれているという。台湾在住の歌人小佐野弾の寄稿文（２０２０・１１・１１、『朝日新聞』）は、「台湾では多数の市民と政府の間に信頼関係が築かれている」、「在住外国人の多くも、政府の発信する情報を信頼している」と言い、女性の蔡英文総統の率いるこの国は人口の９割を超える移民が共生しているが、アジアで初めて同性婚を合法化した国であり、外国人も全民健康保険に加入でき、高質の医療サービスを受けられると、台湾の民主主義の礎を築いた李登輝総統（総統１９９０～２０００）の功績を偲びつつ書いているが、ほんとに政府を信頼できるような国になっていたなんて羨ましい限りだ。

陳玉璽が消えた、行方不明と知らされた泰代は驚いて探し回り、いきなり強制送還されて、今、死刑になるかもしれない境涯にあることを知る。知ったこの日から川田泰代の「良心の囚人」救援活動に挺身する‘平和運動家’‘救援活動家’の人生が始まる。下宿のおばさんを２カ月受け持つことになって陳玉璽の優れた学者の資質、その意欲を知っていた泰代はあらゆる人脈、さらに人脈を開拓して陳玉璽救援運動に取り組んでいる。『良心の囚人』には、陳玉璽の死刑から禁固７年、釈放までの道程が詳細に記述されているが、その行動力には驚嘆される。

日本での救援活動は他人事の受け止め方から抜け出せない。陳玉璽が強制送還されたひと月半後（３・２７）、「日台密約」の犠牲者二号として柳文卿の即日強制送還がなされている。陳玉璽の父親に彼の所在を問い合わせた手紙の返電は「日本にいるはず」だった。消えたことを知った父親の八方手を尽くして突き止められたのは蒋介石の軍法処の留置所に拘置されていて面会も許

されない状態にあるとのことで、この手紙を見せて川田は彼の救援を訴えるが反応は鈍い。突破口となったのは、相談した当時の社会党代議士猪俣浩三が国会衆議院法務委員会で執拗に採りあげてくれたことだった。答弁に立った中川入管局長は、陳玉璽は不法残留者だ、帰国は彼の自由意志であり、旅費も自費だと事実に相反することを平然と答えている。「嘘」の答弁はこの国のお家芸なのか。

この事件を重大視したウイクリー紙『東京オブザーバー』の中島照男記者による日本政府の出入国管理令違反を暴露した大々的報道は陳玉璽救援運動の起爆となった。川田は駅売りのこの新聞をいくつもの駅を回って何十部も買い、誰彼に送った。ハワイにも送った。この新聞の反響はハワイ大学・東西文化センターで炎を挙げた。ハワイの反応は素早く、かつ強烈だった。ハワイ大学の教授たちや市民達はハワイ選出の下院議員の女性宛に「国府」に対して事実糾明するように訴えたことで、ハワイの新聞が一斉に報道した。これに連動して『朝日ジャーナル』が採りあげた。川田は総長に就任していた中村哲にハワイ大学留学生担当教授宛の打電を依頼。陳玉璽の父親からも息子の救援依頼がハワイ大学に届けられ、ハワイ大学で学生集会がもたれ運動は燎原の火の如く広がっていった。

「国府」は外国の動きに敏感だ。外国が「国府」批判の声をあげることに効果のあることを知った川田は日本での救援活動結成に奔走し、外電が６月１８日付けで起訴された陳玉璽が死刑を求刑されたことを伝えた３日後、事件後半年になる６月２４日、宮崎竜介（弁護士）、中村哲（法政大学総長）、高木健夫（評論家）、松岡磐木（法政大学教授）、加藤周一（作家、当時コロンビア大学教授）、石田雄（東京大学教授）、中村敦夫（俳優）による日本での「陳玉璽君を守る会」が結成された。この会はその後、曲折を辿りながら、特にアメリカでの幅広く活発な運動が効をそうしたことは紛れもないが、第一回公判（６８・８・１）を秘密裁判だったのを公開にさせた。だが一人の証人も呼ばれぬたった三時間で終ったいい加減さだった。

起訴理由には陳玉璽が法政大学入学準備中に読んだとされる本が挙げられたがこれが例え事実であったとしても、ベトナム戦争反対集会にちょっと参加し、「国府」が嫌う本を読んだくらいで死刑とは恐れ入る。陳玉璽の自白が有力証拠として提出されたが、それは自殺に追いやられた程の監禁状態にあって、デッチあげられたものと陳玉璽は烈しく否認した。８月１０日の判決にはアムネスティ・インタナショナルアメリカ支部による世界世論への訴えも効果を挙げて、国際社会世論の圧力に屈して台湾軍事法廷は、陳玉璽の死刑求刑の変更を余儀なくされ、被告が滞日中に中国共産党系の華僑新聞『大地報』に協力したことを罪状にした動乱教唆罪で禁固７年の刑いい渡しとなったのだった。死刑が７年になったことは大成功だったと言えるが、陳玉璽に７年も服役しなければならぬ罪科など無いのだから釈放をかちとらねばならぬと、ハワイ大学の教授・学生から市民へ、日本でも運動の裾野を広げていった。

アムネスティアメリカ支部のコロンビア大学教授アイバン・モリス博士が来日、迎えた川田に日本でも支部を作るように要請され、政治、宗教、信条によって抑圧を受けている″良心の囚人″を救済する国際組織であることを知ると川田は猪俣浩三とはかって走り周り、１９７０年４月、アムネスティ日本支部は結成され、金大中拉致事件や在日韓国人政治犯の釈放運動と平行して、陳玉璽の釈放運動を、台湾と共謀した日本の入管当局の法的責任追及によって運動を深化させた。

ハワイ大学と東西文化センターの陳玉璽救済抗議運動は広がり深まったが、アムネスティ・アメリカ支部による各地への訴えは、７年の判決で気が緩み沈滞していた日本の「守る会」に活を

いれることにもなった。１９６９年４月２０日、奈良医大生で自治会活動のリーダーだった在日華僑の李智成が「満腔の怒りをもって佐藤政府の『出入国管理法案』『外国人学校法案』に対して、死をもって抗議する！」という遺書を残して生命を絶った事件は在日華僑青年たちに悲しみと怒りを燃え上がらせ、この二法案粉砕の闘いが火を噴いた。

この闘いは陳玉璽事件への怒りとなり在日中国人青年たちの闘いは陳玉璽救済運動へと進んで、６９年３月２日、善隣会館で発会した「二法案」粉砕国際青年共闘会議は、青年、学生、労働者を交えて在日アジア人留学生を含む大組織に膨れ上がって火となった。この熱塊は反戦、全学連、各大学全共闘、ベ平連等日本の闘う人々、さらに反戦欧米人をも結集した大規模の運動になり、７１年２月８日、入管体制粉砕東京実行委員会主催による「六八年二・八陳玉璽君強制送還弾劾全都総決起集会」が法政大学で開かれ、３月には、『法政評論』臨時増刊号で陳玉璽事件総特集が刊行され、ハワイ大学はもちろん「ハワイ市民連合」による陳玉璽釈放の活発な運動等々によって台湾当局は７１年１０月２５日、３年８ヵ月服役させた陳玉璽を、７年の刑期満了を待たずに「恩赦」で釈放せざるを得なくなったのだった。結束した民衆が勝ったのだ。

川田泰代は書いている。「わたしには三人の成人した娘と息子がある。その息子たちと比べて彼は数段すぐれた青年である。実質的には、たった二ヵ月余りの保護期間であったのだが、あれから、数年間、わたしが彼にそそいだエネルギーは、わたしの二人の息子と、すでに結婚して、一女を生んだ娘とに捧げた母親としての三〇年に余る養育の苦労を遙かに上回ったものであった」と。その苦労の逐一が書かれた『良心の囚人』は、釈放された陳玉璽の７２年１月２７日の日本入管当局への抗議「声明」が結語になっている。この本には「声明」にもあるが、突然の連行に抗議して壁に頭を打ちつけて流れた血で「毛沢東萬歳」と書いて自殺をはかったときの血染めのセーターの写真が載っている。「毛沢東萬歳」。陳玉璽事件は中国の「文化大革命」（１９６６～７６）渦中での事件で、「世界最高の民主主義であるプロレタリア文化大革命」という川田の記述から、川田も「文化大革命」の信奉者だったように思われる。

私事だが、大学の入試で中国からの留学生の面接試験で合格させたくて質問した「私の名前は〇〇です」とか、「今日は晴れです」とかの簡単過ぎる和文英訳も全然出来ず、「毛沢東語録」は英語・日本語ですらすらだったのに呆れたことを思い出した。８７年の北京外語大学へのて赴任時、「上」から食事を招待された。「上」とは共産党で、教員・職員・学生の大学すべてを統括している人である。私が学生達に一人っ子政策など中国批判めいたことを言ったりしたので注意を受けるのかとビクビクしたが、女性の「上」は私の授業に感謝してくれ、私事なども親しく話してくれた。彼女には三人の子がいるが、二番目と三番目の間が１０年離れているのは文化大革命で夫婦が離され、精華大学教授だった夫も農村での重労働を課されるなど筆舌尽きせぬ苦難をなめさせられた、「文化大革命」はどれほど多くの犠牲者を出したか計り知れぬ悪だったと言い、同じようなことを博論指導した留学生から、医師だった父が文化大革命で下放されて受けた悲劇を聞いたが、この時は渦中だったので「毛沢東萬歳」だったのだろう。

釈放されて帰った生まれ故郷は彼を暖かく迎え入れようとはしなかった。死刑を求刑された彼を釈放を勝ち取るまで親身になって闘ってくれたアメリカに渡ってニューヨークに住み、ここで結婚し二人の子の父となり、３０年月賦の家を買って、幸せに暮らしている陳玉璽のその後を、関千枝子本には、川田が１９８７年８月１２日、７１歳の誕生日をニューヨーク・クイーンズ区の陳玉璽の家で迎えたこと、このとき二人の子が父の命の恩人川田のために「ハッピーバースデー」

を歌ってくれたとある。陳玉璽が昔日の恩人たちを訪ねて東京に来たのは８８年で、感極まった感動的場面となったことは容易に想像されるが、陳玉璽にとって悔やみきれない心残りは身元保証人にもなって救援活動に挺身してくれた宮崎竜介が釈放の朗報を知らずに鬼籍にはいっていた（１９７１・１・２３・）ことである。

川田泰代は陳玉璽の釈放を苦難の末だが勝ち取ったことでほっとし、力が抜けたが、陳玉璽の救援活動によって″救援活動家″の肩書きがついてしまったことにもよるのだろうが、以後病に倒れ、臥床の身となるまで「良心の囚人」救援活動に力を注ぐ平和活動家として生き続けた。腎不全で川田泰代の生に終止符が打たれたのは２００１年５月５日で８５年の生涯だった。５月２６日に「偲ぶ会」がプレジデント青山で開かれ、寄せられた追悼のメッセージによって知られる川田の陳玉璽釈放後の活動の足跡を辿ってみたい。

『近代日本総合年表』１971 年 11 月１０日の「沖縄県祖国復帰協議会、返還協定批准に反対し県民大会開催、全軍労、官公労、教職員組合ら１０万１５００人、２４時間ゼネスト、本土では東京の沖縄ゼネスト連帯中央集会など、４２都道府県３２６ヵ所で各派集会、デモ」と記されている、基地付き沖縄返還に反対して逮捕され死刑判決を受けた星野文昭は２００１年に至ってなお徳島刑務所在監中だったが、その星野の再審と仲間の免訴運動に川田が取り組んでいたこと。それより以前の 55 年 5 月 10 日、「米軍、北富士演習場で、着弾地付近に坐り込みの地元民を無視し射撃演習開始、反対闘争激化」と、60 年 7 月 29 日、「北富士演習場で農民 300 人、米軍、自衛隊の演習中止を要求、10 人が着弾地に坐り込み」と記されている北富士演習場の撤去要求闘争などの支援。73 年 8 月の金大中事件、70 年代の尹秀吉の政治亡命実現運動、77 年 5 月 8 日、「三里塚、柴山空港反対同盟ら３７００人、鉄塔撤去に抗議、成田空港付近で機動隊と衝突、負傷 400 人、５、１０に一人死亡」、７８年 3 月 26 日、「三里塚・柴山成田空港反対同盟、滑走路南端の鉄塔再建をめぐり警官隊と未明の攻防、警官１万２０００人厳戒、同日午後、学生ら火炎車２台で港内に突入、管理棟に乱入端末機器破壊、警官威嚇射撃、逮捕１１５人」とある長期にわたる大闘争を共に闘ったことなどが知られる。

川田泰代の訃報は川田の支援で勇気を与えられた反人権運動を闘った多くの人々の心に深い哀しみを刻み、人権確立への新たな闘志をかき立てさせた。川田泰代は言行一致の平和･救援活動家として語り継がねばならぬ人である。

渡邊　澄子（わたなべ・すみこ）は日本近代文学の研究者、大東文化大学名誉教授。東京都生まれ。日本女子大学卒、同大学院中退、大東文化大学教授、２００１年定年退任、名誉教授。野上弥生子など近代女性文学者を研究。著書に『野上弥生子研究』『野上弥生子の文学』『女々しい漱石、雄々しい鴎外』『日本近代女性文学論 闇を拓く』『與謝野晶子』『青鞜の女・尾竹紅吉伝』『林京子－人と文学　“見えない恐怖”の語り部として』『野上彌生子　人と文学』『男漱石を女が読む』『気骨の作家　松田解子　百年の軌跡』など。１９３０年生まれ。　（ウィキペディアより）

■偲ぶ会・追悼文

常に抑圧される側に立った人生

星野文昭

（徳島刑務所在監）

「川田泰代さんを偲ぶ会」に寄せられた追悼文

川田さんが亡くなられたことを聞いて、必ず、再審を実現し、外でお会いできると思っていただけに、本当に残念で仕方ありません。必ずお会いし、これまでの献身的な支援へのお礼はもちろん、川田さんが歩んでこられた人生に触れ、学びつつ、たくさんのお話しができることを楽しみにしていただけに残念です。

川田さんの一生の歩みは、抑圧する者を憎み、抑圧される側に立ち、その解放をともに勝ち取っていこうとする姿勢を貫いた人生だったと思います。特に、朝鮮、中国、アジア人民への深い思い、連帯し解放をめざして生きていこうとする姿勢に僕と暁子、家族はもちろん、多くの人々が感動し、励まされてきました。そして、同じ立場から、71 年 11 月 14 日に基地つき沖縄返還に反対した戦いへの、私と奥深山、荒川君への死刑、重刑攻撃に怒り、それとたたかう 3 人への支援に、早くから取り組んでくださり、それを土台として現在の星野再審運動と奥深山免訴運動の発展を支え続けてくださいました。

川田さんが亡くなって、改めて思うのは、親しい人というのは、肉体を失うことによって、逆に、心の中に生きてくれ、とても身近な存在になるように思います。川田さんも亡くなってもなお、一緒に生きてくれる、いつも向き合い語り合い共に未来へ歩み生きてくれる存在になって生き続けてくれるように思います。

私と暁子（家族）にかけられている無期攻撃は、生きることの全てさえも奪うものですが、だから、それに屈することなく生きようとする時、人にとって、現代に生きるものにとって、最も大切なもの、すなわち、自らと全ての人民の、この現実を変革し、人間解放を勝ち取っていこうとする希求と力をどこまでも信頼し、それを一歩一歩結集し、解き放って、人民が真の社会の主人公となり、全ての人間が人間らしく生きられる社会を築いていくということをつかみとり、それを実現していく力を、全ての労働者、人民と共に一つ一つ勝ち取っていくことができる、そのことをたたかい取ることができたと思います。

再び大恐慌を不可避とし、強国間の潰し合いの争闘戦が戦争と大失業の悲劇をもたらそうとしている。この社会を根本的に変革し、そのような人間解放を実現するために、そのことに情熱を注いでこられた川田さんと共に、どこまでも力を尽くして生きていきたいと思います。

川田さん、いつも共にあってください。

（2001 年 5 月）

【編注】星野文昭さんは 2019 年 5 月 30 日、収容先の東日本成人矯正医療センターで逝去されました。

■偲ぶ会・追悼文

「川田泰代さんを偲ぶ会」に寄せられた追悼文

楊国光

5月19日（土曜日）午前9時半、露満堂片岡健氏より電話が入り、非常に残念なお知らせですが、で始まり、川田泰代女史がさる5月5日にお亡くなりになられたことを知りました、そして「川田泰代を偲ぶ会」の案内状をファックスで届けてくれました。

できれば私もその会に是非出席したいのですが、なにとぞ海を隔てた日本、時間的にもそちらに行くことはかないません。お手伝いもできずほんとうに申し訳なく思っております。

川田様は私にはほんとうに大切な人でした。前世紀の80年代初頭、私が駐在記者として赴任する前ですが、いまは故人の陳重光先生の新宿のお宅で偶然お会いしたのが初めてで、いらい駐在記者としての10年を含め、20年以上のおつきあいをさせていただきました。

先輩の人であるだけに、私は川田様から、ジャーナリストとしてだけでなく、人間としても教えられることが沢山ありました。女史のお力添えで、日本の地で宮崎滔天とその一族、「徳田球一」、「ゾルゲ・尾崎事件」に出会い、私の生涯の貴重な思い出となっております。

また拙著『ある台湾人の軌跡』の執筆・出版の際、多大なご援助をいただいたことも忘れられません。いま『内側からみたゾルゲ・尾崎事件』を書いておりますが、これが出来るのもひとえに川田様のお力添えと思っております。いずれ訪日の機会があると思います。その際は、川田様の墓参をも考えております。また皆様とは女史の思い出話をしたいと思っております。

（2001年5月）

李東埼

川田泰代先生のご逝去を心からお悔やみ申し上げます。思えば先生とは 30 年近いお付き合いでした、正義感が強く、人情に厚い人でした。平和と国際親善、人権擁護のために生涯を貫き通されたのも、その人となりのせいだと思います。

金大中救出運動の時、ヨーロッパで開かれたアムネスティ総会に乗り込み、何と、大型の紙芝居を用意していって事件の顛末と韓国軍事政権の悪逆ぶりを全世界の前に強烈にアピールしたのでした。あの行動力こそまさに川田先生の真骨頂と申してよいでしょう。

私は、川田先生が千駄ヶ谷にお住まいの時に、よくお食事に呼ばれました。そして、朝鮮統一問題、韓国民主化問題について意見をたたかわせたことが昨日のことのように懐かしく思い出されます。

先生が朝鮮の自主的平和統一、韓国民主化闘争に影になり、日向になって力をお貸し下さったのを決して忘れることが出来ません。朝鮮の平和統一はもうすぐそこまで来ているのに、もう少し生きていてくださったらなあ、と悔しくてなりません。

寧日なかった平和と国際親善の不滅の戦士、川田泰代先生よ、安らかにお休みください。

（2001年5月）

■納骨式

親族による納骨式

（２００１年５月１０日、青山霊園）

川田泰代の親族と福田政夫氏（右から３人目）

川田泰代の姪、吉永小百合さん（右端）

■納骨式

■墓参

墓参（2020 年 6 月 27 日、青山霊園

河正雄

河正雄（左から２人目）と福田政夫氏（右端）

■張炳煌プロフィル

台湾の著名な書道家　張炳煌（ちょう・へいこう）

（Zhang Xinhuang・ジャン・シンホワン）

１９４９年生まれ。書道家。書道の傍ら詩の古文を研究し、１９８０年に台湾の三つのテレビ局で「中国書道」を主宰。国内外で数々の賞を受賞している。現在、淡江大学中国学科教授、文華芸術センター副所長、書道研究室長主任。字は子靖。

張炳煌氏（産経国際書会のホームページより）

張炳煌氏は台湾の「中国書道」というテレビ番組の司会をはじめ、書道の活性化を提唱し、２０年近く前からテレビの「今日の言葉（一日一字）」でも常用漢字の使用を実演している。長年にわたり書道教育を中心とした芸術活動を積極的に推進し、書風の精力的な発展と現代的・国際的な活動で高い評価を得ている。

書道家として有名なだけでなく、20年以上前からテレビで書道を教えていることもあり、台湾では知名度が高い。張炳煌氏は古今の碑文や書を学び、それらを作品に統合し、世界各国の書家との交流を通じて、中国書道の発展と重層的な領域を深く理解してきた。

さらに伝統的な書道の進歩に加えて、淡江大学の情報工学チームを率いて、世界でも最も先進的な「デジタル電子筆記システム」を開発し、筆記具を新たな段階に導いている。

現在、淡江大学中文系教授兼芸術センター副所長・書道研究室長、中国書学会会長、国際書道連盟総会理事長、国際蘭亭筆会名誉副会長・台湾会長、中国詩書画家協会理事長、台湾仏教伝道協会理事長、書友雑誌・書道進階雑誌発行人兼社長、中国通信学校書道科教授など。

（「百度百科」より）

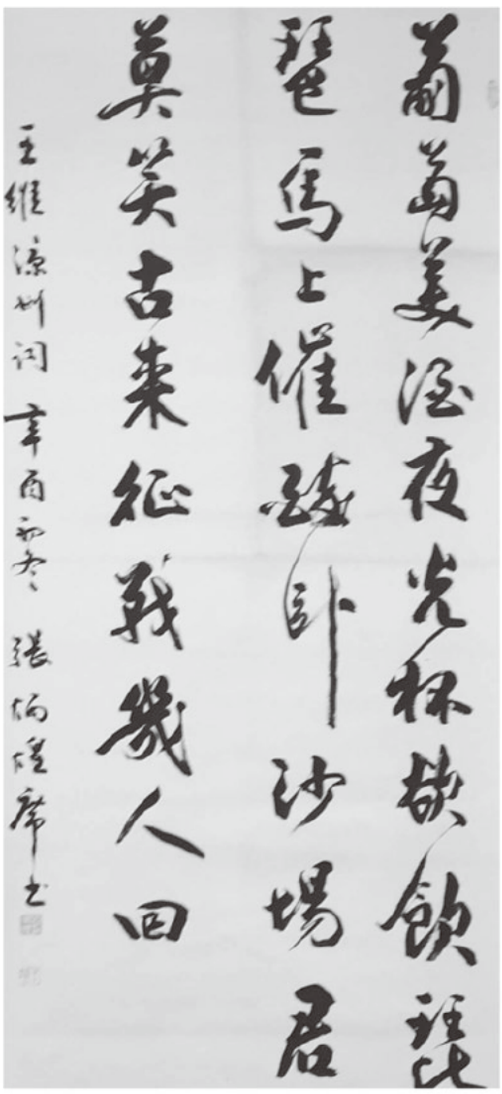
【参考サイト】

・台湾の書家、張炳煌氏が日本で講演　書道のデジタル化に注目集まる
https://japan.cna.com.tw/news/asoc/201810200003.aspx

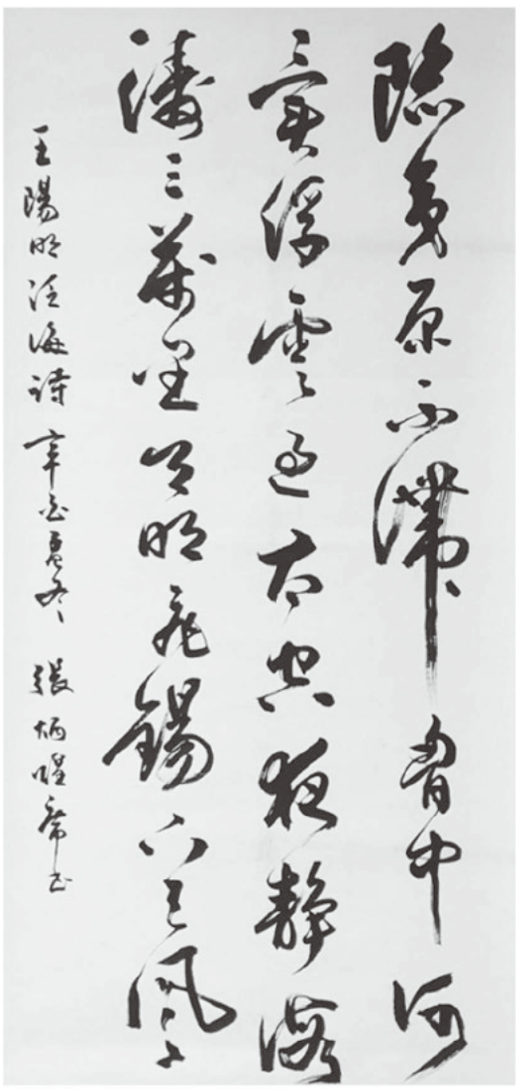
・台湾書家、張炳煌先生（中華民国書学会会長、淡江大学教授）特別講演
https://www.sankei-shokai.jp/newsletter/20180517172345.html

・「百度百科」（張炳煌）
https://baike.baidu.com/item/%E5%BC%A0%E7%82%B3%E7%85%8C/2215527

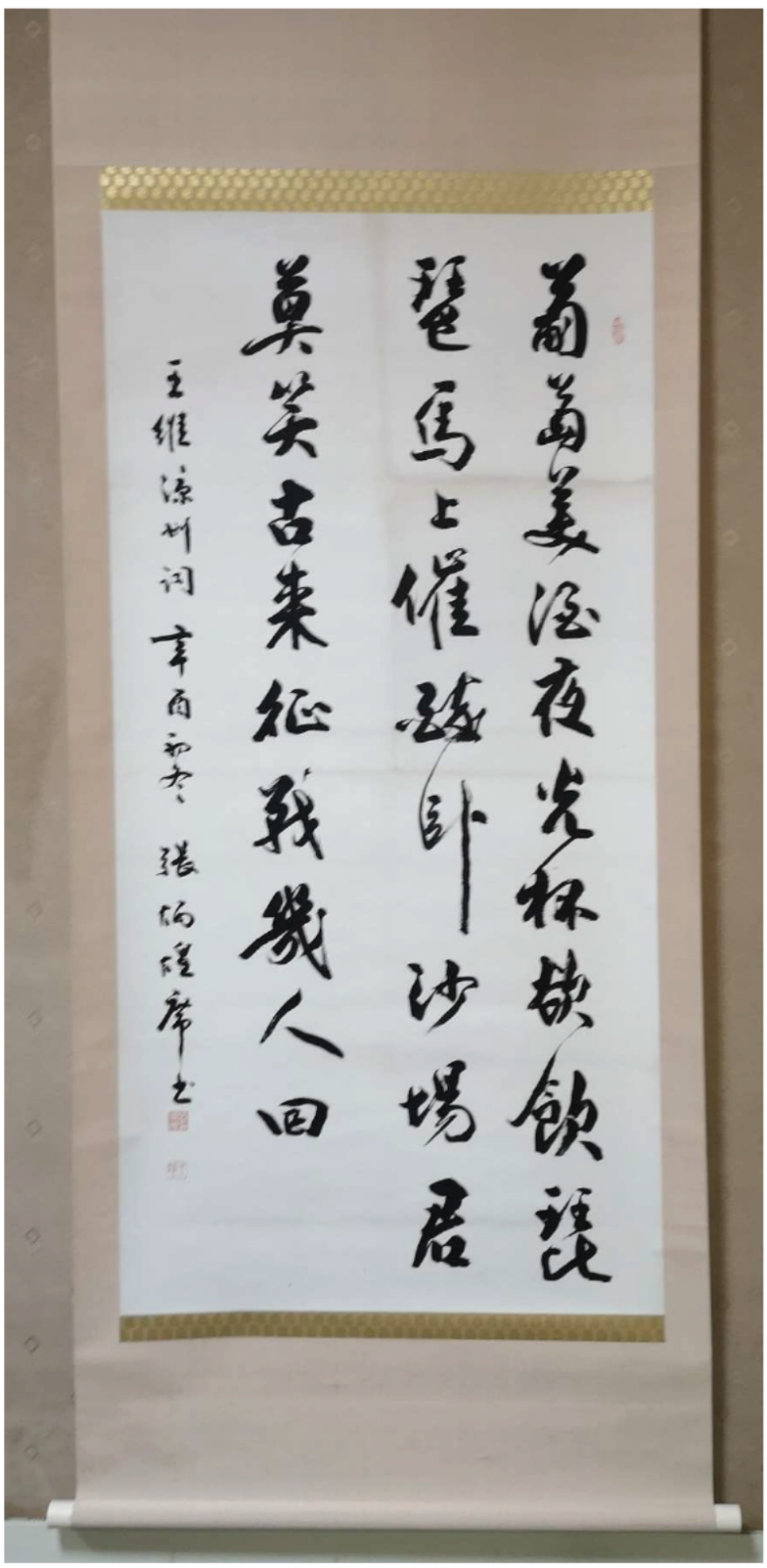
王翰　涼州詞



王陽明　泛海詩



王翰　涼州詞



（秋田県仙北市立角館町平福記念美術館所蔵）

王翰（おうかん）「涼州詞（りょうしゅうし）」

原文（白文）

葡萄美酒夜光杯
欲飲琵琶馬上催
酔臥沙場君莫笑
古来征戦幾人回

書き下し文

葡萄（ぶどう）の美酒　夜光の杯

飲まんと欲（ほっ）すれば　琵琶馬上に催（もよお）す

酔うて沙場（さじょう）に臥（ふ）すとも　君笑ふこと莫（な）かれ

古来征戦　幾人（いくたり）か回（かえ）る

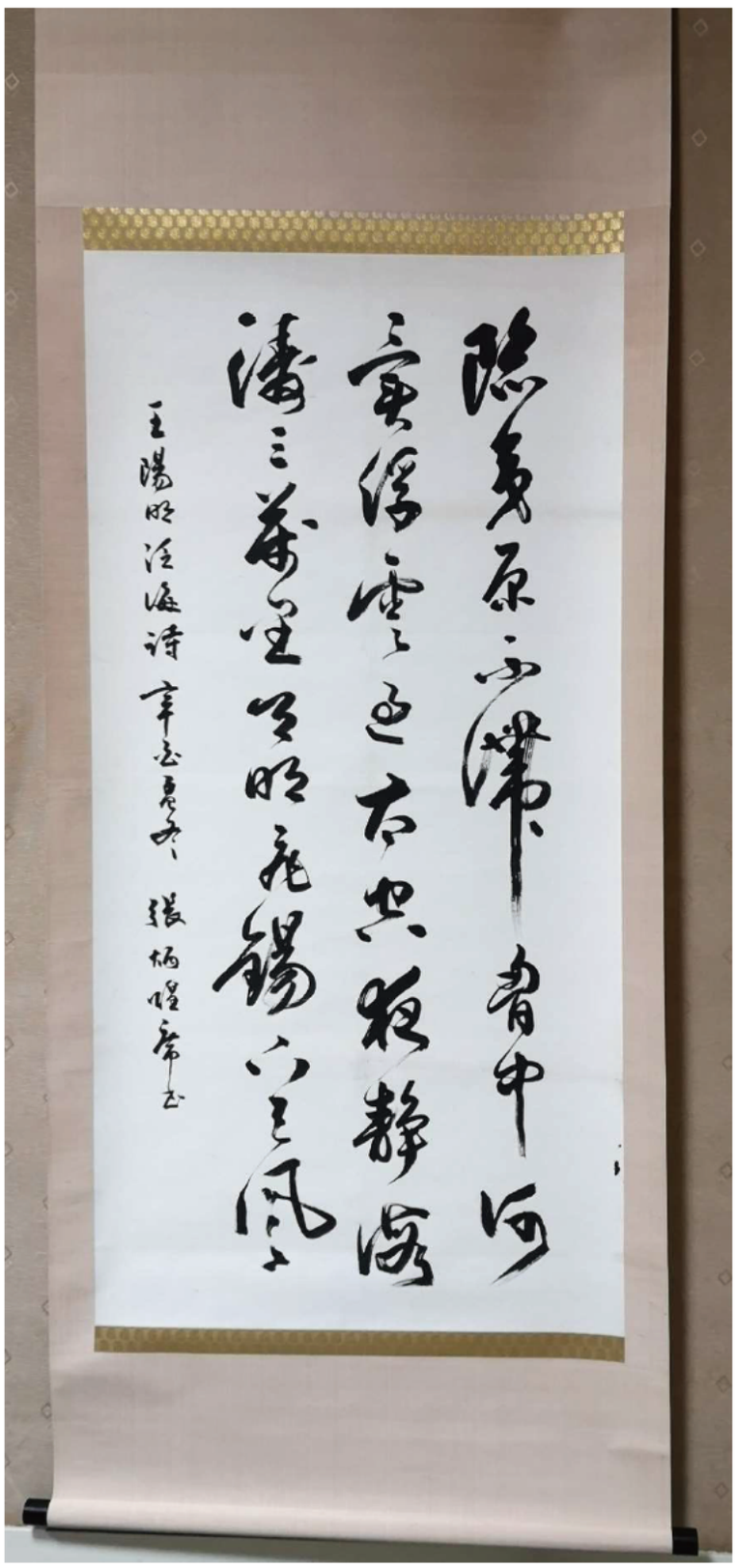
現代語訳（口語訳）

ぶどうで作ったうまい酒を、（月光を受けて）夜光の杯にそそぐ飲もうとすると、琵琶の音が馬の上に鳴り響いた。酔って砂漠に倒れ伏してしまっても、君よ、笑ってはいけない。昔から、戦争に行ったもののうち、どれだけの人が帰ってきただろうか。（私たちも明日もしれない身なのだから）

王翰　プロフィール

中国・唐代の詩人。字（あざな）は子羽。并州晋陽県（山西省）の出身。豪放な性格で酒を好み、家に名馬と美姫を集めて、狩猟や宴会に日を送っていた。711（景雲 2）年、進士に及第して駕部員外郎に任ぜられたが、晩年は不遇であった。酒をこよなく愛し、題材にとった作品が多く見られる。

王陽明「泛海詩



（秋田県仙北市立角館町平福記念美術館所蔵）

王陽明「泛海詩」

原文（白文）

險夷原不滯胸中
何異浮雲過太空
夜靜海濤三萬里
月明飛錫下天風

書き下し文

険夷　原より胸中に滞らず

何ぞ異ならん　浮雲の太空を過ぐるに

夜は静かなり　海濤三万里

月明　錫を飛ばして天風に下る

現代語訳（口語訳）

逆境であれ順境であれ、それらに心を煩わされることなど人生行路の逆境・順境など意に介さない。それらは、あたかも浮雲が空を通り過ぎるようなものなのだから。静かな夜の大海原に、海の波が三万里の彼方まで続いている。その三万里の海上に小舟を浮かべている。月明かりに乗じて錫杖を手にした道士が天風を御しながら飛来する、まるでそんな広大無碍な心境である。

王陽明　プロフィール

本名　王守仁。1472 年～1529 年。中国、明代の学者・政治家。字は伯安、号は陽明、諡は文成。余姚（浙江省）の人。弘治 12（1499）年、進士に及第。寧王の乱を平定し、名声を博した。朱子学を批判し、心即理・知行合一・致良知を説き、陽明学を完成させた。著書に『伝習録』『王文成公全書』などがある。

河正雄氏寄贈　張炳煌書幅　二点

秋田県仙北市立角館町平福記念美術館　所蔵

王翰　「涼州詞」

（印）

葡萄美酒夜光杯、欲飲琵

琶馬上催、酔臥沙場君

莫笑、古来征戦幾人回

王維 涼州詞　辛酉初冬　張炳煌 席書　（印）

王陽明　「泛海詩」

險夷原不滞胸中、何

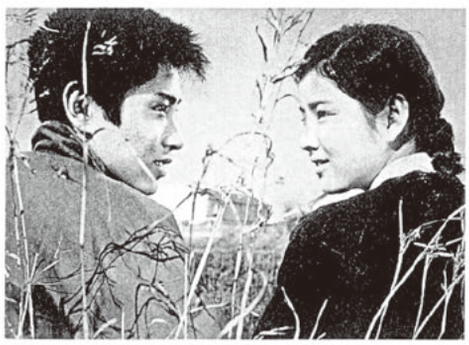
異浮雲過太空、夜靜海

濤三萬里、月明飛錫下天風

王陽明　泛海詩　辛酉孟冬　張炳煌席書

（註）辛酉　シンユウ　かのととり　一九八一（昭和五十一）年
初冬・孟冬、旧暦十月の事
（註）涼州詞作者が「王維」と書かれているのは、「王翰」の間違え

キューポラのある街



11月22日（金）　19：30上映

●1962年日活作品／99分

監督・脚本：浦山桐郎
原作：早船ちよ　脚本：今村昌平
撮影：姫田真佐久　音楽：黛敏郎
出演：吉永小百合／浜田光夫／東野英治郎／小沢昭一／
吉行和子／加藤武／北林谷栄／菅井きん／市川好郎

鋳物の町・埼玉県川口市を舞台に、そこに住む職人気質のガンコな父を持つジュンとタカユキの姉弟が貧しくとも強く生きる様子を描いている。ジュンの友だちの在日少女・芳枝の一家が「帰国船」に乗るため、川口駅での別れのシーンは胸にせまる。

キューポラの街の原風景

河 正 雄（光州市立美術館名誉館長）

「キューポラのある街」には当時息づいていた人々の人情が色濃く描かれている。貧しさを乗り越え強く、明るく、逞しく、のびのびと育つ子供達が生きる良い時代が描かれている。鋳物工場や荒川の土手など作品に描かれた映像には川口の懐かしい原風景があり、川口で生きてきた幾年月が私の故郷になったということだろう。

1959年、高校卒業を機に18年間の秋田での生活に私は別れを告げた。上京して川口に縁を結んだのも、母の手伝いでヤミ米を運んだ得意先が多くあった事からだった。その時川口駅前で鋳物を運ぶ荷車を馬が引いており、馬糞があちこちに落ちている有り様だった。

荒川沿いの芝川河岸にマッチ箱のような住まいで私は生活していた。そこはキューポラ（銑鉄溶解炉）が林立する鋳物工場地帯であり、キューポラの赤い炎が燃える吹きの日は騒音と振動、硫黄の臭いと煤塵が立ちこめる劣悪な環境であった。当時、川口の鋳物を支えたのは「金の卵」と言われた、高校進学が不可能な東北地方からの集団就職でやって来た若者や外国人（特に朝鮮人）の労働力であった。

その年の秋に襲った伊勢湾台風のため荒川、芝川が氾濫し洪水が起こった。我が家も押入の上段まで浸水（その翌年もまた台風の影響で浸水）し泣かされた。975人の在日朝鮮人が初めて北朝鮮に帰還するようになったのはその年の年末のことである。当時、画家になる夢を共に語り合った名古屋のK君が北朝鮮に帰国することとなり、別れのために上京し我が家に泊まった。K君からは無事に帰国したと一度連絡があったが、その後は音信が途絶え未だ消息が掴めない。

1961年、私は一切を捨てるほどの挫折から日本での生活の展望と自信を失い、北朝鮮での新しい生活に全てを賭けてみようと単身、北朝鮮への帰還船での「帰国」を決心した。K君の事もあったが天国だという北朝鮮の宣伝に乗せられて憧憬を抱いてもいたのだ。私は帰国の手続きのため川口の朝鮮総連に出向いた。ところが「帰るのはいつでも出来る。残って川口の同胞達の権益のために働いてほしい。」と慰留され、そこに務めることとなった。

その年の秋のこと、丸めた冊子と帽子を握りしめ、ベージュのレインコートに身を包んだ男性が事務所を訪れた。顔色は黒ずんで見え、髪はボサボサ、構わない身なりは今にして思えば刑事コロンボのようであつた。「私は浦山桐郎という映画監督です。この度、川口を舞台にして児童文学作家早船ちよの小説『キューポラのある街』を映画化したいのです。在日朝鮮人の問題も川口で生きるありのままの姿を等身大で伝えたい。このシナリオの中で朝鮮人の生活情緒と違うところを監修してほしいのです。そして撮影の際には川口の朝鮮人達の協力をお願いしたい。」とシナリオを置いていった。後日、監督が訪れた時も前回と全く同じいでたちで静かに話されたが、その姿にはどことなく健康さを欠いているように思われた（監督はこの10数年後に亡くなられた）。その時監督は鋳物職人が集まる「ハーモニカ長屋」の赤提灯などに足を運び鋳物の世界を取材した話をされ真摯な人柄を感じた。

何回かのミーティングを重ね、川口駅前で北朝鮮に帰る家族との別れのシーンの撮影が行われた。最終電車が行ってからの寒い深夜の撮影ではあったがエキストラとして川口の同胞達が100名以上も集まった。共和国の旗を振り「金日成将軍の歌」を合唱しているところにジュン役の吉永小百合が見送るために白い息を吐きながら駆けつけて来る。その時、16才の若さだった吉永小百合がカメラの前に立ち止まりアップになる。カメラを見つめ、視線を逸らさない。その澄んだ瞳は宝石よりも輝いて美しく見えた。

吉永小百合は今までに100本以上の映画に出ているそうだが「キューポラのある街」は代表作、これを超える作品はないという。北朝鮮に帰る人達との別れのシーンが心に強く残っており、今も帰った方々がどうしているのだろうかと考えるのだそうだ。

私もキューポラのある街で在日と祖国の狭間の中で生きた境涯と人生を振り返りながら、当時帰った10万もの在日帰還者やK君のこと、日本人拉致問題と今後の日朝問題の行く末に心を痛め、考えている事が多い。

（民団『語り継ごう「在日」を！』　2002年11月19日付）

■研究論文

柳文卿・陳玉爾事件とアムネスティ・インターナショナル日本の設立

――日本における台湾独立運動をめぐる一断面

前田直樹
（元広島大学教員）
「広島法学」38 巻２号（2014 年）

はじめに

アムネスティ・インターナショナル（Amnesty International、以下ＡＩと略記）日本支部の初代理事長は、社会派・人権派弁護士として戦前から活動し、戦後は日本社会党代議士を８期務めた猪俣浩三である。猪俣はＡＩ日本支部設立の契機を以下のように回想している。

> 1969 年９月から 10 月にかけてヨーロッパ議会制度を視察したが、「帰路途中のワシントン空港で、エール大学教授陳隆志（台湾出身者）の突然の出迎えを受け、アムネスティ・インターナショナルの米国支部に導かれた。そこでアムネスティの性格と趣旨を説明され、日本支部の創設を約束した。」（下線部引用者）（１）

猪俣浩三は陳の突然の訪問を受けて、日本支部の設立を決意したという。しかし、猪俣は親中派としても知られる代議士であり、他方、名高い国際法学者である陳隆志はＡＩの会員であるものの、同時に当時すでに台湾独立派としても名を知られていた（２）。親中派と台湾独立派との接点は、とりわけ当時の日本の政治的イデオロギー状況を考慮すれば、奇異に感じさせる。政治的立場を異にする２人が国を超えて会談した契機は何であったのか。

本小論の目的は、日本における台湾独立運動と関係の深い柳文卿事件・陳玉爾事件（３）を契機とするＡＩ日本支部設立の経緯を探ることで、日本で展開された政治犯釈放工作の一端を再整理することにある。

１．柳文卿事件をめぐって

日本での台湾独立運動に参加していた柳文卿は、オーバーステイであったため、1968 年３月 27 日午後４時過ぎに入管に出頭した。ところが、従来の入管の対応とは異なり、退去命令を受けて直ちに身柄を拘束された。早くも翌 27 日には、午前９時半離陸の中華航空機で台湾に強制送還された。中華航空機の出発間際には、強制送還の情報を得た台湾独立派（台湾青年独立連盟）の活動家が、柳の送還を阻止しようとして羽田空港の滑走路内に侵入し、10 名が逮捕されるという、いわゆる羽田事件が起きた。柳の抵抗する様子はもとより、台湾独立派青年の拘束される様子が写真入りで新聞に掲載されたため、政治犯の強制送還は広く耳目を集めることとなった。

反中国国民党運動や台湾自由化・民主化運動は、1960 年の雷震事件（４）の後、主に海外で展開されるようになり、台湾独立運動と密接な関わりを持った。戦後日本での台湾独立運動は、廖文毅の台湾共和国、史明の独立台湾会等があるが、柳文卿事件当時、もっとも活発に活動していたのは台湾青年独立連盟で、雑誌『台湾青年』の発行を通じて台湾独立を主張し、台湾での政治

的弾圧の実態を訴えていた。台湾青年独立連盟は王育徳（5）が組織した台湾青年社が前身で、当時の主な活動メンバーは、許世楷（6）、宗像隆幸（宋重陽）（7）、黄昭堂（8）らであった。後に台湾青年独立連盟は、他の海外にある台湾独立運動組織と共に台湾独立建国連盟を 1970 年に結成した。

羽田事件によって黄昭堂らは逮捕されたが、許世楷は当日入管に向かっていたため、羽田事件に関わってはいなかった。そこで許が柳文卿の送還について、「人づてに、弁護士で社会党の代議士だった猪俣浩三さんを紹介してもらい、相談したところ、猪俣さんは国会で質問」（9）してくれることになったという。これが、日本で台湾独立運動に携わる者と親中派社会党代議士との最初の接点であった。

猪俣浩三は、戦前に人民戦線事件、ゾルゲ事件、戦後には鹿地事件（キャノン機関拉致事件）や、政治犯引き渡しに関わる尹秀吉退去取消訴訟での弁護に携わり、人権擁護派の弁護士として知られていた。また、1947 年から 1969 年までは社会党所属の衆議院議員でもあった。猪俣は、政治的には親中派であり、1962 年には「中国政府の個人招待をうけ、夫妻で中国各地を旅行。五月一日のメーデーには、毛沢東主席ら中国首脳部とともに天安門上で見物」（10）したほどであった。

猪俣浩三、そして社会党・民主社会党の衆参議院議員は、劉文卿事件での入国管理局（以下、入管）の対応を国会委員会で質問した。事件直後の３月から４月にかけてだけで計７回である。これらを通じて台湾独立運動に従事する台湾人の強制送還をめぐる日台間「密約」が次第に明らかになっていった。

猪俣浩三らの質問には、いずれも入管局長の中川進（11）が答弁した。中川は、劉文卿は日本における滞在の根拠を失って不法滞在になっており、速やかに送還するのは当然の責務であるとの見解を繰り返した。しかし、不法滞在者に対する入管の従来の対応は、刑事法上の犯罪者等を除き、いわゆる仮放免にしていたのである。しかも、劉文卿の代理人から送還執行停止が求められ ることを承知しながらであった。中川は、３月 26 日の「朝早く、午前八時ごろでございますか、弁護士さんから私のほうへ、これから［執行停止命令の申請を］提起するという通知がございましたので、提起されたと思いましたが、正式に知りましたのは、役所へ参りまして、本人が飛行機で立ったあとでございまして、午前十時二十分に私のほうに通知がございました。」と、送還の執行停止命令が出されるであろうことを承知しつつも、あくまでも間に合わなかったからであると述べた（12）。

ところが、台湾側の史料では、劉文卿を 27 日に送還することが前もって、遅くとも３月 22 日までには、決定済であったことが示されている。3 月 22 日付の台湾外交部文書は、日本側は柳文卿を「本（三）月二十七日に我が方へ引き渡すことを既に決定している」（13）と伝えており、入管は裁判所の「介入」を回避して 27 日に送還しなければならなかったこと、言い換えれば、日台間で前もって劉文卿の送還で合意のあったことを表している。

このような政治犯の引き渡しに関わる日台間「密約」は、実は 1967 年 10 月３日から当時の法務大臣、田中伊三次と中川入管局長が訪台した中で結ばれたものであった。当時、麻薬密輸等によって収容されている台湾人は二百数十名にのぼったが、台湾は長きにわたって引き取りを拒否していた（14）。猪俣浩三は、これらを台湾側が引き取る代わりに柳文卿ら台湾独立派を日本側 は送還すると約束したのではないかと、中川を糾した。中川は、「そういうような約束をした覚えは

全然ございません」と答弁しつつも、「誠意を示す意味で、私どものほうから、オーバーステイになっている中国人がたくさんおるから、台湾に引き取っていただきたい、ぜひこの引き取りについて考えてもらいたいということを申したことはございます」と述べた（15）。これは、猪俣が述べるように、台湾独立派を「一人引き取るごとに［オーバーステイの］三十人という約束」に等しいものであった（16）。許世楷によれば、送還する台湾独立派の取引人数は６人で、１人目が柳文卿、２人目は許だったという（17）。

さらに、猪俣浩三らが劉文卿の台湾送還後の安全について問うたところ、中川入管局長は台湾側から保障を得たので送還したと答弁した。その保障とは、台湾の駐日大使館による入国管理局長をあて名にした覚書（２月７日付）と、陳之邁駐日大使からの身体自由に関する口頭保障であった。駐日大使館の覚書は、「台湾独立運動等の政治活動をなした者に対し、過去の如何を問わず処罰しないという寛大な精神を執っている」（18）と述べたものであった。そのうえで、中川は、柳文卿が身体への危険なく台湾に帰った証として、台湾到着後に「両親と一緒にとった写真まで私ども入手しております」とまで述べた（４月４日）（19）。

これら入管の提示する保障について、猪俣浩三は、４月 19 日、「飛行場へみな家族が出迎える写真なんかを見せておる」、「日本にこういう一札［大使館覚書を指す］を出した手前、そういう芝居をやったのかもしれぬ」との疑問を呈した（20）。

まさに、この柳文卿の写真は「芝居」であり、実は入管が要請して撮影されたものであった。入管は、柳の送還決定が台北に伝えられた３月 22 日、駐日大使館に対して、「外交部が方法を講じて柳の家族あるいは親友を二十七日正午に出迎えさせ、写真をとって速やかに大使館から当該局に渡し利用できる」ように求めていたのである。「偽台湾青年分子［ママ］を調査強制送還することは初めてのことであるため、入管は相当に不安を感じている」（21）からであった。このため、写真や覚書を提示することで日本国内からの批判に対処しようとしたのであった。このような入管の態度は、陳玉爾事件によってますます明瞭になっていった。

２．陳玉爾事件からＡＩ設立へ

猪俣浩三らが国会で柳文卿事件の入管処理を追求していた頃、同じように 台湾へ強制送還された別の事案、陳玉爾事件が明るみに出た。陳は、先の大使館覚書の出された翌日の２月８日に入管に出向いたところ、オーバーステイで拘束され、９日の午前に台湾へ送還されたのである（22）。出頭日に拘束され翌日には強制送還された点で、柳文卿の送還と全く同じであった。ただ、陳は柳と同じく政治的信条が問題とされた台湾出身者であったものの、台湾独立派ではなく、むしろ政治的には親中派の人物であった。

陳玉爾は、ハワイ大学大学院で学んでいたが、その間の親中国的言動が問題となり、米国ビザの延長を拒否され、また台湾に戻ることもできなくなった。このため、日本に渡り、人づてにジャーナリスト、川田泰代を頼った。川田は、親中派のジャーナリストであり、その中国関連の人脈を駆使して陳を保護した。陳は、「東京華僑総会の副会長呉普文氏のところへ行って、大陸に行きたいということを訴え」、「その副会長の紹介によって『大字報』という新聞で働」くようになり、『大字報』紙上に「東方紅曲技団の毛沢東思想による革命的感情はすばらしい」と題する文章等を書いていたという（23）。

川田泰代は、陳玉爾が送還された直後、関係者から陳は自由意思で帰国したとの連絡を受けたのみで、その消息を知るすべはなかった。川田は陳の自由意思での帰国を疑っていたが、4月12日になって陳の父親からの手紙を受け取ったことで、陳が台湾に強制送還されたのち、台湾警備総司令部に収監され、軍事裁判所での審理を待っていることをようやく知った。ところが、川田が日中友好協会（正統）に支援を求めても、常任理事から「在日中国人の団体にきいたら、陳玉爾は台湾人だから、中国人ではないといったよ。だから、手伝うわけにはいかない」(24) と言われるなど、従来の親中派の人脈では何らの進展も望めなかった。そこで、「ほんとうに孤立しながら、どこへ訴えに行っていいものか迷いに迷っていたのです。国会の法務委員会で訴えてもらうことが一ばんいいと思い、猪俣浩三先生におねがい」(25) することになったという。

この川田泰代の訴えから、猪俣浩三は、4月19日、衆議院法務委員会で柳文卿事件の追求に続けて陳玉爾についての質問を初めて行った。答弁に立った中川入管局長は、「ただいまの陳玉璽の件は、実はただいま先生から初めて伺って、全然存じませんので、さっそく調査させていただきたいと思います」(26) と述べた。

しかし、これまた柳文卿同様に、入管当局は台湾側との交渉を経て陳玉爾を送還していたのである。外交部史料では、2か月も前の2月3日の時点で、陳を「日本側は我が方に送還して引き渡す意向であり、大使館は日本側と折衝中である」ことが明らかにされている (27)。さらに、駐日大使館による覚書が入管へ手交された翌日（2月8日）には、大使館から台北の外交部に対して、「日本側と話がまとまり、陳を台湾へ送り返す。九日午前九時半に中華航空機に搭乗」(28) と、明確に報告されているのである。

この陳玉爾事件の過程で、川田泰代は知人を介して宗像隆幸と会い、協力を仰いだ。台湾青年独立連盟は、「蒋政権はわれわれを中国共産党の手先と非難していた」ため、台湾当局に口実を与えないように日本人である宗像が表に立って支援することになった。また、アムネスティ米国支部が陳の救援活動を展開したことによって、宗像はアムネスティの存在を知ることになった (29)。一方、川田は、陳玉爾や陳の学んでいたハワイ大学関係者らを中心にして「陳玉爾を守る会」を結成し、さらにはベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）を巻き込んで (30)、記者会見等の形で陳の救援活動に取り組んだ。この「台湾青年を守る会」、「陳玉爾を守る会」がきっかけとなり、これらへの参加者の一部がＡＩ日本支部の初代理事を務めることになる。すなわち、ＡＩ日本支部設立の発起人がここでほぼ出揃うこととなった。

ほぼ時を同じくして、宗像隆幸はＡＩ日本支部の設立を構想した。なぜならば、宗像は、彭明敏 (31) から「日本に『台湾の政治犯を救う会』というような組織をつくれないかと相談されたとき、私が考えたのは、アムネスティ・インターナショナルの日本支部を設立することであった。ちょうど陳玉爾事　件で、アムネスティという国際的な政治犯救援組織の存在を知ったばかりだったからである」。さらに、日本支部の「中心になる人物」を探している時、猪俣浩三が次の総選挙には出馬せず、議員引退後は人権問題に専念するとの意向を伝え聞き、「まさにはまり役であると思った」と言う (32)。そこで、宗像は猪俣の訪米を利用して陳隆志との面会を設定したのであった。陳は台湾独立派であるばかりか、許世楷と縁戚関係にあった（陳隆志夫人は許世楷夫人盧千恵の妹）。このようにして猪俣と陳隆志との対面がなされたのであった。

これ以降、ＡＩの日本支部設立の動きが進んだ。猪俣浩三、川田泰代、宗像隆幸は打ち合わせの上で1970年1月19日、支部設立の発起人会を開催した。4月23日には正式にＡＩ日本支部

が発足した。この流れの中で許世楷は、川田を通じて猪俣に呼ばれ、日本支部に関わることになった（33）。

ＡＩ日本支部の設立直後に用意されたパンフレット『アムネスティ国際委員会日本支部』（発行日記述なし）によれば、初代理事は、猪俣浩三、許世楷、宗像隆幸、川田泰代を除くと、次の通りであった。

中村哲　法政大学総長、後に日本社会党所属参議院議員。「陳玉爾を守る会」世話人。
中村敦夫　俳優。「陳玉爾を守る会」世話人。
宮崎繁樹　明治大学教授、後に明治大学総長。「台湾青年を守る会」（34）メンバー。
鶴見良行　評論家。
石野久夫　日本社会党所属衆議院議員。
穂積七郎　日本社会党所属衆議院議員。
小沢正元　日中友好協会事務局長。
白西紳一郎　日本国際貿易促進協会（35）事務局、後に日中協会理事長。
渡辺道子　弁護士、後に日本 YWCA 理事長。
西田公一　弁護士、後に第二東京弁護士会会長。

彼らは、当時は「左派と見られた日本人」（許世楷）（36）であり、社会党関係者や親中派が半数以上を占めていた。

結びかえて

柳文卿事件、そして陳玉爾事件は、ＡＩ日本支部による台湾政治犯の釈放・軽減運動に道を開いたばかりではなかった。日本の法学界、さらには一般世論に対して、政治犯引き渡しと人権擁護全般についての課題を投げかける嚆矢となった。しかも、日本政府をして入管政策の厳格化の必要性を認識させるものとなった。法務省と入管は、強制送還決定後に裁判所が「介入」して執行停止命令を受けるのを回避すべく、1969 年前後に出入国管理法の改正を試みたが、猪俣浩三らの反対のみならず、広範な疑問の表明を受けて断念することになった。これはあくまでも先送りであり、日本の入管政策の改善や政治犯保護制度の確立、ひいては人権保障の制度的拡大は、引き続き大きな課題として残ることになった。

猪俣浩三は、自らの年譜の中で「アムネスティ日本支部は正式に発足。［中略］理事は、中村哲、鶴見良行、宮崎繁樹、穂積七郎、西田公一ら。」（37）と記し、日本支部設立に尽力した許世楷や宗像隆幸の名前を記していない。なぜなら、正式設立にあたって先のパンフレット『アムネスティ国際委員会 日本支部』を関係者とマスコミに配布したところ、いわゆる左派から「抗議」 を受けたからである。それは、猪俣がパンフレットの「日本支部設立について」の中で陳隆志との面会に言及し、しかも理事に許世楷と宗像隆幸が加わっていたためであった。さらに、理事の社会党議員らは、許と宗像を理事から外すように要望してきたという（38）。結局、猪俣と許らは相談の上で、配布済のパンフレットと余ったパンフレットから許世楷と宗像隆幸の名前を「黒く塗りつぶした」（39）という。台湾独立派との関係を少なくとも表面上はなかったことにしようとしたのである。

しかしながら、これらによっても台湾独立派とＡＩ日本支部との関係は消え去りはしなかった。許世楷ら台湾独立派は、当初の目的通り、ＡＩを通じた政治犯の釈放・減刑に取り組んでいった。それらは主として、台湾の政治 犯リストを作成し、彼らの置かれている状況を取りまとめ、これら文書を密かに日本へ持ち出してロンドンのＡＩ本部へ送付することであった(40)。また時には、雑誌『台湾青年』にも掲載された。むろん、このような活動は限られたものであった。しかし、政治犯が何ら公開されることなく判決を受け、刑を執行される状況下において、その実態を明らかにすることで海外社会の耳目を集めて、一定程度の牽制力を台湾当局に与えたと言うことができる。

（1）山下恒夫編著『聞書き猪俣浩三自伝――無産党弁護士の昭和史』(思想の科学社、1982 年)、336 ページ。

（2）陳は、1967 年、著名な政治学者であるハロルド・ラスウェル（Harold D. Lasswell）との共著を出版し、その中で主権未決定論の立場から台湾住民の投票に基づく自決を主張した。Chen Lung-chu (陳隆志) and Harold D. Lasswell, Formosa, China, and the United Nations: Formosa in the World Community (New York: St. Martin's Press, 1967).

（3）柳文卿事件そして陳玉爾事件とは、両人の台湾への強制送還と、一連の釈放または減刑運動を指す。柳は日本における台湾独立運動への従事、陳は米国と日本での中国寄りの言動によって、帰国すれば政治犯として処罰されることが予測可能な状況下で強制送還された。

（4）台湾における権威主義体制の確立と米国による台湾海峡固定化政策との関連から現代台湾史における雷震事件の意味あいを検討したものとして、前田直樹「台灣政治自 由化與美國對台政策：從二二八事件到雷震案件」、中央研究院台湾史研究所編『二二八事件 60 週年紀年論文集』(台北市：中央研究院、2008 年)、463-485 ページ。

（5）1924-1985 年。戦後に日本へ亡命し、台湾独立運動に従事した。台湾語研究で名高い。

（6）1934 年生。東京大学大学院修了。後に津田塾大学教授、台北駐日経済文化代表処代表（駐日代表)。

（7）宋重陽は筆名。1936 年生。明治大学卒。『台湾青年』編集長。

（8）1932-2011 年。東京大学大学院修了。後に昭和大学教授、台湾独立建国連盟主席。

（9）盧千恵『私のなかのよき日本―台湾駐日代表夫人の回想五十年』(草思社、2007 年)、97 ページ。著者の盧千恵は許世楷夫人である。また、許によれば、初対面では許の政治的背景ゆえか、猪俣は「無愛想」な対応だったという。許世楷氏への筆者インタビュー、2011 年５月９日、台中市内の許氏自宅にて（以下、許世楷インタビュー)。

(10) 山下恒夫『聞書き猪俣浩三自伝』、333 ページ。

(11) 入管は 1952 年まで外務省外局であったことから、1990 年代まで外務省出身者が局長を務めていた（「充て職」)。中川局長も外務省出身である。後に外務大臣官房審議官を経て在ユーゴースラヴィア大使。

(12)『第五十八回国会参議院予算委員会議録』第十三号（1968 年４月４日)。なお、岡沢完治（民主社会党所属衆議院議員）は、柳文卿の代理人ではなく、裁判所が連絡を行ったと語っている。「三月二十七日の午前八時ごろに地裁の民事二部の受付係から入管のほうに電話をさせてもらって、本件は審査中であるから送還の執行を見合わせるようということも要望しておる。」『第五十八国会衆議院法務委員会議録』第二十六号(1968 年 4 月 26 日)。

(13) 外交部亜東太平洋司「為遣返偽台獨 子柳文卿事」、1968 年３月 22 日、外交部案、「偽台獨 子柳文卿」、006.3/0029、台北市：中央研究院近代史研究所档案館所蔵（以下、近史所档案館)。

(14) 入管ないし法務省の国会答弁では人数は一定しないものの、最低 218 人いたことが明らかにされている。

（15）猪俣の質問と中川の回答の概略は以下の通り。▽猪俣「ここにいらっしゃる田中さんが法務大臣時分に、あなたと一緒に台湾へ渡って、台湾政府と何か相談してきた。それは、どうも日本に台湾人でアヘン密輸をやるような人間が相当たくさんつかまって大村収容所に入れられているが、台湾政府はこれを 引き取らぬ。そこで、それを引き取るという交換条件で、そのかわり台湾独立運動なんかやっている人間は帰そうじゃないかという、何か話をして帰ってきた。」▽中川「台湾人の法的地位の改善について考慮してもらいたいという要求がなされました。その点について話をしたことは、事実でございます。そのときにおきまして、私どもといたしましては、まあ交換条件というわけではございませんが、とにかく台湾人の法的地位の改善ということについて、もちろんわれわれとしては検討はしてみたいが、結論としてははなはだむずかしいと思われる。しかし、とにかく誠意を示す意味で、私どものほうから、オーバーステイになっている中国人がたくさんおるから、台湾に引き取っていただきたい、ぜひこの引き取りについて考えてもらいたいということを申したことはございます。しかし、ただいま御指摘のごとく、台湾の独立運動をやっておる者を帰す――先ほど交換ということをたしか先生おっしゃったかと思いますが、そういうような約束をした覚えは全然ございません。」『第五十八国会衆議院法務委員会議録』第二十三号（1968 年 4 月 19 日）。

（16）猪俣の発言は以下の通り。「柳君と同じような立場の人が四十人もあるのですがね、これらを一体――こういう送還をしたのは二人で、アヘン密輸業者六十人引き取ってもらったそうですから、一人引き取るごとに三十人という約束をなさったということだが、ほんとうだと思う。ちょうどいまそういうことになる。二人に対して六十人引き取った。そういう取引に使われるというようなことも、これ私は非常な問題だと思うのですね。それはそういうことをやったとおっしゃるまいから、これ以上言いませんが、ちょうど比率は、そうなると二人強制送還して六十人引き取ってもった、こういう一対三十ということはほんとうの話だといま思うわけです。」『第五十八国会衆議院法務委員会議録』第二十六号（1968 年 4 月 26 日）。

（17）許世楷インタビュー。

（18）川田泰代『良心の因人―陳玉璽小伝』（亜紀書房、1972 年）、38－39 ページ。

（19）『第五十八回国会参議院予算委員会議録』第十三号（1968 年 4 月 4 日）。中川が保障文書と写真に初めて言及した箇所は以下の通り。「ことしの二月の七日付で大使館から私どもの入管局にあてまして、こういう台湾独立とか何とか、そういう政治活動をやっておった者を本国に帰しても処罰はしないということを公文書で確約しております。それから越えて三月五日の日には陳大使が［中略］絶対にそういう者をいじめたりすることはない、生命身体の自由を侵されることはないということを話しております。」、「それから問題の柳という三月二十七日に送りました人も、その日にさっそく飛行場で家族、すなわち両親に引き渡されまして、両親と一緒にとった写真まで私ども入手しております。」

（20）『第五十八国会衆議院法務委員会議録』第二十三号（1968 年 4 月 19 日）。

（21）駐日大使館から外交部あて公電、密急、1968 年 3 月 22 日、外交部案、「偽台獨子柳文卿」、006.3/0029、近史所档案館。

（22）宗像は、陳は 2 月 8 日に送還されたと記している。宗像隆幸『台湾独立運動私記』、175 ページ。

（23）川田泰代『良心の因人』、121 ページ。

（24）川田泰代『良心の因人』、78 ページ。許世楷によれば、陳は中国渡航を中国筋に拒否され、また日本から台湾に対して陳についての照会が行われたという。許世楷インタビュー。また、管見のかぎりでは、外交部が東京在住の陳玉爾を送還目標にした直接の契機は国民党からの外交部への問い合わせであったようである。中国国民党中央委員会第三委員会から外交部あて、1967 年 10 月 5 日、外交部案、「陳玉爾」、007.1/89001、近史所档案館。

（25）川田泰代『良心の因人』、123 ページ。

（26）『第五十八国会衆議院法務委員会議録』第二十三号（1968 年４月 19 日）。

（27）外交部から駐日大使館あて公電、機密、1968 年２月３日、外交部案、「陳玉爾」、007.1/89001、近史所档案館。

（28）駐日大使館から外交部、1968 年２月８日、秘急特、外交部案、「陳玉爾」、007.1/89001、近史所档案館。

（29）宗像隆幸『台湾独立運動私記』、177-178 ページ。宗像はＡＩを知った経緯として陳玉爾事件のみに言及しているが、ＡＩは柳文卿事件でも行動を起こしている。駐米大使館から外交部あて公電、「美國國際赦免組織函詢柳文卿情形」、1968 年８月 16 日、外交部案、「偽台獨子柳文卿」、006.3/0029、近史所档案館。

（30）川田泰代「台湾青年の強制送還―反戦と変革に関する国際会議（1968 年８月 11～13 日、京都・国立国際会議場）での発言―」（『旧「べ平連」運動の情報ページ』、URL: www.jca.apc.org/beheiren/KawadaYasuyo-Chingyokuji-jiken.htm）、アクセス日：2014 年９月１日。小田実・鶴見俊輔編『反戦と変革』（学芸書房、1968 年）からの再録。

（31）元台湾大学教授。「台湾自救運動宣言」を発表し逮捕されたが、ＡＩをはじめとする海外からの批判で釈放され、当局の監視下にあった。1970 年１月に密かに出国した。後に帰国し民主進歩党から総統選挙に出馬した。

（32）宗像隆幸『台湾独立運動私記』、243 ページ。

（33）許世楷インタビュー。

（34）柳文卿事件の際に結成されたもので、宮崎の他、阿川弘之や平林たい子、大宅壮一らが参加していた。

（35）日中間の貿易・経済交流促進を目的として 1954 年に創設された団体である。

（36）許世楷インタビュー。

（37）山下恒夫『聞書き猪俣浩三自伝』、336 ページ。

（38）宗像隆幸『台湾独立運動私記―三十五年の夢』（文芸春秋社、1996 年）、245-246 ページ。

（39）許世楷インタビュー。

（40）1970 年代のＡＩ日本支部の活動は特に関西地区で活発であった。その中心に位置したのがＡＩ日本支部の副理事長を努めた川久保公夫（当時大阪市立大学教授、後に大阪経済法科大学学長）であった。彼の元でＡＩ関西グループはアジアの政治犯の釈放運動に取り組み、同時に東京在住の台湾独立派（主に台湾青年独立連盟）と連携しながら台湾の政治犯の釈放・減刑に積極的に関与した。この活動内容は以下に詳しい。

Lynn Miles, “Into the Big Wide Open," Linda Gail Arrigo and Lynn Miles, A Borrowed Voice: Taiwan Human Rights through International Networks, 1960-1980 (Taipei:Social Empowerment Alliance, 2008), even page of pp. 96-170.

台湾政治犯の釈放・減刑に取り組んだＡＩ関係者は、台湾在住の協力者が作成した政治犯名簿をスパイ映画さながらに密かに台湾外へ持ち出し、ロンドンのＡＩ本部等へ送付した。三宅清子（陳孟和訳）「我能為他們做什麼」、李禎祥等編撰『人權之路：台灣人權民主回顧』（台北市：玉山社、2002 年）、152-154 ページ。Winston Luo, “The Quiet Constancy of Miyake Kiyoko," Arrigo and Miles, A Borrowed Voice, odd page of pp. 113-117.

名簿を入手して政治犯の特定が可能となったＡＩは、国民党当局へ釈放・減刑を働きかけた。むろん、個人を特定しての照会に対して、国民党当局は拘束や服役の事実を否定できなかった。

■長谷川テルの足跡

長谷川テル（緑川英子）の足跡をたどる

川田泰代

（月刊『状況と主体』より）

この早春、ひょんなことから中国東北地区を主とした旅行の団長となって、哈爾浜（ハルビン）、佳木斯（ジャムス）、牡丹江、延吉、長春、瀋陽と、往復の北京、上海を入れると、九都市をかけ廻ることができた。団の名は「緑川英子（1）維持日本留学支援百人委員会第一回訪中団」（2）。

▼二人の終息の地佳木斯へ

今回の訪中では、「望郷の星」（3）やその他の文献で知られない実相を追求した。黒竜江省はたとえまだ厳寒の季節は去らず、積雪におおわれ、寒風が吹きすさんでいようとも、二人の終息の地佳木斯を訪れよう。そして、佳木斯市郊外にある風光明媚な丘にあるという長谷川テルと劉仁のために一九八三年七月十一日建立されたという合塚に参拝したかったのだ。また、哈爾浜市にある東北烈士記念館に顕彰されている長谷川テルの壁を目撃したい。

長谷川テルと劉仁。結婚の記念写真＝1936年秋（利根光一著『増補版　テルの生涯』　要文社より）

私は生前の長谷川テルを知っている数少ない日本人である。一九三七年四月、彼女はパスポートなしで、横浜から外国船に乗り日本を脱出した。盧溝橋事変勃発に先がけること３カ月前、彼女は日本帝国主義の中国侵略が「偽満州国」設立に止まらず、つきることのない拡大を予測して日本を捨てた。

私は当時、ノンポリの東京女子大生で、三七年三月に卒業し、婦人画報という雑誌社に就職した。テルと私の父とは縁つづき（4）になっていたので、三七年の冬、なぜか渋谷区千駄谷の私の家へ彼女はよく立寄った。だが、テルは私と親しく、妹のような愛情をそそいでくれはしたものの、大切な話は一さいしてくれなかった。色白で、きれいな声の人、よく笑い、よく饒舌ったその人の眼指しは、なにか、もう一つ射すように静かで深いものがあった。いいたいことを言えなかったのは、私が時事問題に対する認識が足りないことをみてとっていたのだろう。

▼テルの遺児を支援

それから四十八年、大きな歴史の流れを、正しく方向づけて生き、たたかい、そして若くして命を中国東北地区で失ったテルへの哀惜と、数々の疑問が、たえず私の胸にささった刺でありつづけた。この刺を抜くために、いろいろな試みをしてみた。

まず、日本へ留学を希望したいという長谷川テルの息子劉星のために、「劉星さんの日本留学を支える会」を組織した。多くの理解者の賛同を得て、ともかくも、一九八三年一月から八三年七月まで、それを成功させた。和光市の理化学研究所電子計算機室で、荻田直史理博の下に、ソフ

■長谷川テルの足跡

トウエアーを学ぶことを果たした。彼は現在、北京工業大学物理学系講師として、専門の道に就くことを得た。 文革の年、北京大学で、原子物理学科に学んだ彼は、いろいろな理由で、文革中はひどく辛い生活を余儀なくされた。エリート校で学ぶことができた秀才たちは、いずれも、十年に及ぶ困難な道を歩かねばならなかったが、彼にとって、両親の一人が、国交のない敵性国日本人であったことの不幸も背負い、大学で学んだ原子物理学という専門の道で職業を得ることを拒まれたのは事実である。

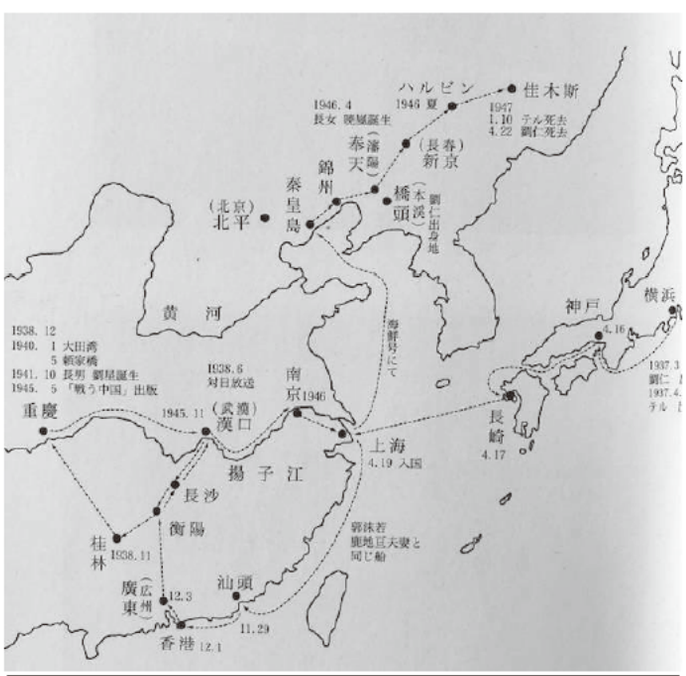
妹の劉暁蘭（5）は現在日本に来ている。劉暁蘭の日本留学支援百人委員会（世話人代表川田泰代）が留学資金を計画し、一九八四年十一月初旬に来日、現在、調布市にある国立電気通信大学電子計算機科有山正孝教授について勉学中である。彼女は二年前に、寧夏省中衛回族自治区を出て、北京郊外にある二・七機車工廠附属職工大学の数学教師に就任している。一女の母である。

私たちは百人委員会世話人とその賛同者の呼びかけで、私費留学生として受入れ、資金援助をつづけている。正直なことをいって、これはもはや生やさしいことではないのだ。だが、その苦悩を背負い、痛みを感じた時、私は長谷川テルたちの中国における反戦十年の生きざまを察し、ともかくも、遺児たちの日本留学を成功させようと、決心を新たにする。

来年三月三十一日までに、劉暁蘭は留学を終えて、現在の職場に戻ることになっている。それはそれで、国交回復後の日中関係においては、悪いことではないと確信している。とはいえ、二人の遺児を日本で、合計三ヵ年余、留学を支えるからといって、長谷川テルや劉仁の歩いたものを理解し終えるものとは思わない。二人が両親に別れたのはあまりに幼ない日であった。

▼胸にささったトゲ

劉仁とテルは反戦エスペランチストとして東京で結ばれた。彼等は一九三六年二月末、築地小劇場で新協劇団主催の「夜明け前」を観劇している記録がある。その頃、急激に交りが深くなったのだと思うが、ゴリゴリの堅物土木技師である父長谷川幸之助さんは反日帝思想を強く持った「満州国」留学生との国際結婚などは認める筈がない。彼女は日本脱出まで、一日も同棲することができなかった。察するところ、東京、千駄ヶ谷にあるわが家は親類であり、父は保守政治家であり実業家でもあった。劉仁と逢う場合の親へのカモフラージュに立寄ったのではなかろうか。また、日本脱出の決意前には、何とかしてタイピストとしての仕事をわたしの父にさがしてもらいたかったようでもあった。



長谷川テル・劉仁の経路図＝せせらぎ出版『長谷川テル－日中戦争下で反戦放送をした日本女性』より）

わが家に遊びに来た、すき透るような真白な肌に黒ブチの眼鏡をかけた小柄で内股の和服姿の彼女が、ニコニコと笑って語りかけた。茶目っ気たっぷりの魅力ある人物だった。わたしはその

■長谷川テルの足跡

度の厚い眼鏡の底に、いつももっと語りかけたい何物かがあったような気がする。だが、ノンポリのブルジョア娘の女子大生に、何をいったってしかたがないという鋭い洞察があったのだろう。テルは思想的なものを、露ほども見せなかった。一九三七年四月十五日、彼女がごく身近な人にしか教えず、日本を脱出して上海に向った。わたしはその秘密を教えてもらえないあまり上等でない旧知である。だからこそ、わたしの近代史への反省と共に、長谷川テルの存在は五十年近くこの胸にささりっぱなしのトゲであった。知らないということが恥かしいのだ。

東北烈士記念館の建物は元は「満州国」の治安と称して、日本天皇の名の下に東北地方の人民へのめったやたらに、血ぬられた暴挙をほしいままに司令していた関東軍憲兵隊総司令部の建物であったそうだ。この四、五年、ようやく旧満州をなつかしんで多くの日本人観光客が哈爾浜を訪れるようになった。そのほとんどの人々は、解放前の日本からの入植者や軍人などの引揚者のようである。哈爾浜へ来ても、キタイスカヤ等、往年栄えた日系露人の街や旧居を観て、ノスタルジヤをなぐさめるのが目的である。だが、その旅行団の多くの人々が、中国人烈士革命烈士の生きざまを観て驚く。特に長谷川テルの顕彰されている壁はそう大きなスペースではないが、そこに歴然とした日本婦人の和服姿の写真が、中国人である夫劉仁と共に存在していることを認めずにはいられない。東北が解放されたということは、その犠牲者であった烈士たちが、拷問死された地下室から階上に上がった。その一隅に、日本婦人、長谷川テルが、中国人烈士と共に浮かび上がったことについて、日本人は襟を正して、その近代史を大切にしようではないか。

ハルビン市東北烈士記念館の長谷川テルコーナー＝せせらぎ出版『長谷川テル－日中戦争下で反戦放送をした日本女性』より（中国・黒竜江省）

▼「日中両国人民の娘に」

書籍『緑の五月』（6）の赤い帯の宣伝文には「抗日戦争の時、日本に『嬌声の売国奴』と罵られた長谷川テルが、中国で『国際主義戦士』と称讃。ありし日の周恩来総理に『あなたは日本人民の忠実な、立派な娘で、ほんとうの愛国者だ』と言われた時、長谷川テルが『私は日中両国人民の忠実な娘になりたい』と答えた。彼女の一生は短かったが、この崇高な願望は完全に遂げられた」と書いてある。

かつて一九四一年、劉仁・長谷川テルらは重慶で文化工作隊に加わって働いていた。七月二十五日、小さな晩餐会が灯火管制下で行われた。主催は文化工作委員会で、郭沫若のための、帰国・抗戦参加四周年記念のものでもある。周恩来・鄧穎超夫妻も出席していた。周恩来はこの時、先の言葉を日本人女性長谷川テルに告げた。テルが以上のように答えると、妻の鄧穎超は署名の時、長谷川テルの傍に名前を書いた。共に肩を比べて戦おうという意味であるということだ。

実は長谷川テルの戸籍は一九五六年、父である長谷川幸之助によって「失踪者」として本籍地の戸籍係に登録されているのだという。娘照子（7）には二人の遺児があったことを、長谷川家は

■長谷川テルの足跡

牡丹江から帰国したエスペランチスト由比忠之進からきいて知っている。由比は牡市の工場で働いている時、偶然に劉維から聞いた。

ともかくも今はこの世の人ではくなった。だが、黒竜江省佳木斯市人民政府は国際主義戦士長谷川テルと同志劉仁のために、合塚を建立している。ここが死亡の場所であることが明らかに証明されている故人は、「失踪者」として祖国で取扱われていることは不当であり、残念でならないからだ。異国へ残した孫たちの遺産相続問題を安じたためか？

ともかくも、一人でも多くの日本人旅行者が哈爾浜の東北烈士記念館を訪れ、佳木斯の合塚に参拝し、この数奇な運命に生きたまことに得難い国際主義戦士長谷川テルの三十五年の生涯を理解してほしい。妊娠中絶手術の失敗で逝った彼女はもっと生きたかった。

それが、両国のあるいは両民族の友好平和の原点でもあることを確信している。

(1) 中国でのペンネーム。エスペラント名は Verda Majo（ヴェルダ・マーヨ=「緑の五月」の意味)。

(2) 1985 年 3 月 27 日に日本を出発。団員 6 人。

(3) 長谷川テルが主人公の日中合作テレビドラマ。栗原小巻がテル役を演じた。1980 年 5 月 26 日 TBS 系放映。脚本岩間芳樹。制作テレパック・東京放送。

(4) 父川田友之の母つねの姪の子。長谷川テルと川田泰代ははとこ同士。テルの母長谷川よねは茨城県北相馬郡海老原家の人。

(5) 東京電気通信大、奈良女子大への留学後、1990 年 5 月～1991 年 3 月福島大へ留学。1992 年春、日本国籍取得。日本名長谷川暁子（はせがわ・あきこ)。著書に『二つの祖国の狭間に生きるー長谷川テルの遺児暁子の半生』(2012 年、同時代社)。

(6) 中国語版『緑色的五月ー緑川英子記念』(中国エスペランチスト龔佩康編集）の日本語訳。友常一雄訳。

(7) 照子は長谷川テルの通称。川田泰代は「わたしにとってはテルではなく『照子さん』であった」と書き記している。

【編注】「長谷川テル（緑川英子）の足跡をたどる」は、月刊『状況と主体』(谷沢書房）に掲載された川田泰代の訪中ルポ。上下２回。それぞれ「国際主義戦士緑川英子、劉仁の合塚に参拝」（1985 年 10 月、A5 判 16 頁）と「哈爾浜市、東北烈士記念館など」(1986 年 8 月、同 14 頁）の副題が付けられている。本稿では、上下２回のルポを抜粋・再構成して掲載した。名前は原則として長谷川テルに統一。川田泰代による長谷川テルに関する原稿は、「愛と憎しみー反戦エスペランチスト　長谷川テルの生涯」(『婦人民主新聞』1972 年 7 月 14 日号)、「抗日反戦に生命をかけたエスペランチストのことー若き日のその人に接して」(月刊『日中』1978 年 8 月号)、「川田泰代さんに聞く長谷川テル＝ヴェルダ・マーヨ」(日本エスペラント協会発行『エスペラント』1993 年４月号）などがある。

川田泰代から（１９９７年6月１０日付）

困った時だけ連絡させていただきます。

同封、[redacted]さんから届いたファックスをハガキで送ります。

昨年の暮、虎の門病院に入院してから、私の経腎管理が狂ってしまいました。

ご存知のように、腎不全になり、人工透析なっける健康状態になるまでのは、私にとって、大層ショックな出来ごとです。

虎の門病院の入院費が高く、支払はないことには、退院できず、無理をして支払います。

1

病院の福祉係から、日生区役所の高齢者福祉課に連絡してくれたおかげで、身体障害者の認定格をもらいました。

おかげで、[redacted]さんへの家賃の支払いが軽減されています。[redacted]さんの怒りは大変なものです。

その上、決めるまでの、十三万五千円ぐらいの時は、三万五千円、とか、一万円を住友銀行借金の方、彼の口座に振込んでいます。

私もさっぱり、支払いたいのです。そして、同封

2

で、私の代りにお金の借位をはじめました。

① [redacted]

(2) [redacted]

(3) [redacted]

これは五千万

ご存知のように、人工透析に週に三日通っています。普通の人は、一週間は七日ですが、私は四日です。その四日に、老人の一人住いの雑用を片附けるけれはなりません。

3

①の方は文書にするような証拠が来ました。

(2)と(3)は、私の事情をよく理解してくれる人を間に入れて、弁護士に取立てを頼んでいます。

年元に、そう文書がくるので、後送します。

[redacted]さんの怒りはもっともなことだと思います。

どうか、あなたから、私が知る人数をしていることはなく、大変参っていて、その解決に努力していることお伝えいたなきたいと存じます。

4

■手紙

川田泰代から（１９９７年６月１０日付）

とにかく、杖をつき、よかるが小はなちい老い
さらばえた、一番困窮している当人です。

人間が嫌いになって、モモやトヤナと仲良
く暮すあなたは、まさに稀な者です。
いろんなことが解ってきて、もっと安住の安い、
都会住宅に引越しすることも考えています。
近所にお店があるところがいいと思います。
この間の日曜日、カンヌの映画祭でがうこのつら
をとってうなぎ」を見に行きました。老人パスを

5

つかって、入場料は金千円　今料日平は好
きな野菜です。役所庁舎もあるので、杖が
滑ってみずくいきました。
関係休題！

川田泰代

一九九七年六月一〇日

[redacted]

6

債務残高確認書など

金銭債務残高確認及びその返済猶予の念書

平成5年7月21日

借主
川田泰代 様

貸主 [redacted]

貸主連帯保証人 [redacted]

貴殿より平成4年11月2日付借用致しました¥5,000,00の借入金について、同年12月中に全額の返済の約束でしたが、当方の都合により いまだ一部も返済出来ません。本日この残債が¥2,500,000ーであることを確認し、下記の通り返済する事を約束致します

記

1. 平成5年7月30日までに ¥1,000,000ー
2. 平成5年9月30日までに ¥1,500,000ー

尚　当初の約束通り、この借用に係る5年間分の金利相当額は、上記2.の日付に精算御支払い致します。
上記の通り必ず実行致しますので、何とぞ返済の遅延を認めて下さい。

債務残高確認書

川田泰代様

(1) 貴殿より平成7年7月28日付借用致しました金弐百五拾万円也（¥2,500,000ー）の内下記返済分

① 1996.6.22　¥150000ー
② 〃 8.02　150000ー
③ 〃 9.12　150000ー
④ 〃 11.23　150000ー
計 ¥600,000ー

上記を差引いた残高 ¥1,900,000ー を確認します

(2) 上記残金について、下記の通り返済致します。

① 平成9年7月10日までに　¥100,000ー
② 平成9年8月10日 〃　¥300,000ー
③ 平成9年11月10日 〃　¥700,000ー
④ 平成9年12月以降毎月10日づつ残りを返済します
⑤ 利息は残金について年5%を上記元金返済迄支払います。

以上

上記の通り必ず返済する事を確約致します。

平成9年6月5日

[redacted]

■写真

第２回世界ジャーナリスト集会に参加した日本ジャーナリスト会議の代表団。「代表団の中でもペーペー（普通の団員）の私たち（関千枝子さんと川田泰代さん）は、いつも記念写真を撮って後ろの方で顔が見えても小さいのですが、この時は誰か（中国の方）が『女性の方を前に出してください』と言い、珍しく女性４人が前に出て並びました」と関千枝子さんは振り返る。前列右から５人目が川田泰代さん、３人目が関千枝子さん、その間にいるのが事務局長の蒲田さん。川田さんの左隣り（左から６人目）が小林団長＝1960 年、関千枝子さん提供

第２回世界ジャーナリスト集会での一コマ。右から２人目が川田泰代さん、３人目が小林団長（読売）、右端は当時新聞労連副委員長の原さん＝1960 年、関千枝子さん提供

■写真

オーストリアのバーデンで開かれた第２回世界ジャーナリスト集会の後、ソ連や東欧（チェコ、ハンガリー、東ドイツ）を回った。３日間ぐらいずつの駆け足の旅だった。「この写真はハンガリーだったと思います」（関千枝子さん）。右端が川田泰代さん＝1960 年、関千枝子さん提供

日本ジャーナリスト会議代表団の一行は、第２回世界ジャーナリスト集会に参加した後、中国にも立ち寄った。関千枝子さんは「中国到着直後の写真。日本以外の国の人々も参加している。立って話しているのは中国の方です」と語る。中央奥の壁に毛沢東の写真が貼られている。川田泰代さんは左から８人目。アメリカの雑誌などで“赤い代表団”と非難されたりしたため、「帰国した川田さんを待っていたのは、社会や職場でのひどい中傷と圧迫だった」（関千枝子さん）という＝1960 年、関千枝子さん提供

■写真

川田泰代

北朝鮮の金剛山で。前列中央が川田泰代

団　長（단장）
田中寿美子（다나카 스미코）
日本社会党参議院議員
日本婦人会議顧問
朝鮮女性と連帯する会代表
朝鮮の自主的平和統一を支持する婦人国際会議準備委員長

副団長（부단장）
山下正子（야마시타 마사코）
日本婦人会議議長
朝鮮の自主的平和統一を支持する婦人国際会議準備委員
朝鮮の統一のための第2回世界会議代表委員

副団長（부단장）
川田泰代（가와다 야스요）
朝鮮女性と連帯する会会員
朝鮮の自主的平和統一を支持する婦人国際会議準備委員
アムネスティインターナショナル日本支部委員

秘書長（비서장）
清水澄子（시미즈 스미코）
日本婦人会議事務局長
朝鮮女性と連帯する会事務局長
朝鮮の自主的平和統一を支持する婦人国際会議準備委員

秘書次長（비서차장）
津和慶子（쓰와 게이코）
日本婦人会議中央常任委員
朝鮮の自主的平和統一を支持する
婦人国際会議準備委員会事務局員

団　員（단원）
今吉まさえ（이마요시 마사에）
日本婦人会議福岡県本部副議長
朝鮮の自主的平和統一を支持する福岡県委員会委員

団　員（단원）
岩切伸子（이와키리 노부코）
日本婦人会議宮崎県本部事務局長
日本社会党宮崎市議会議員

団　員（단원）
土屋さく（쓰치야 사꾸）
日本婦人会議千葉県本部議長
朝鮮婦人と連帯する千葉県婦人の会会長

団　員（단원）
堤　捨子（쓰쓰미 스테코）
日本婦人会議兵庫県本部議長
朝鮮問題を考える兵庫県婦人の会会員

団　員（단원）
馬場富美（바바 후미）
日本婦人会議愛媛県本部事務局長
朝鮮婦人と連帯する愛媛県婦人の会事務局員

団　員（단원）
真鍋和代（마나베 가즈요）
日本婦人会議山口県本部議長
日朝友好を深める山口県婦人の会事務局長

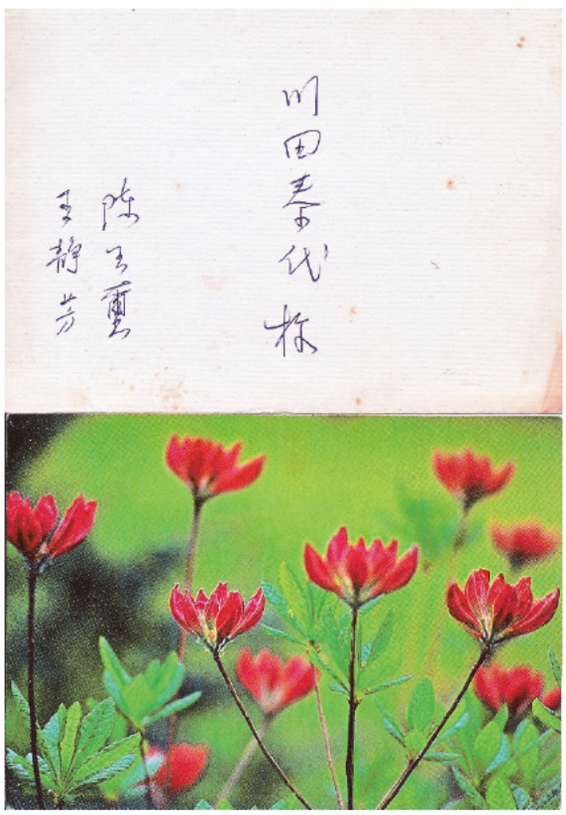
団　員（단원）
山中紀代子（야마나카 기요코）
日本婦人会議大阪府本部事務局長
朝鮮の自主的平和統一を支持する大阪婦人連絡会会員

団　員（단원）
小林洋美（고바야시 히로미）
日本婦人会議新潟県本部事務局長
朝鮮女性と連帯する会（新潟）準備委員

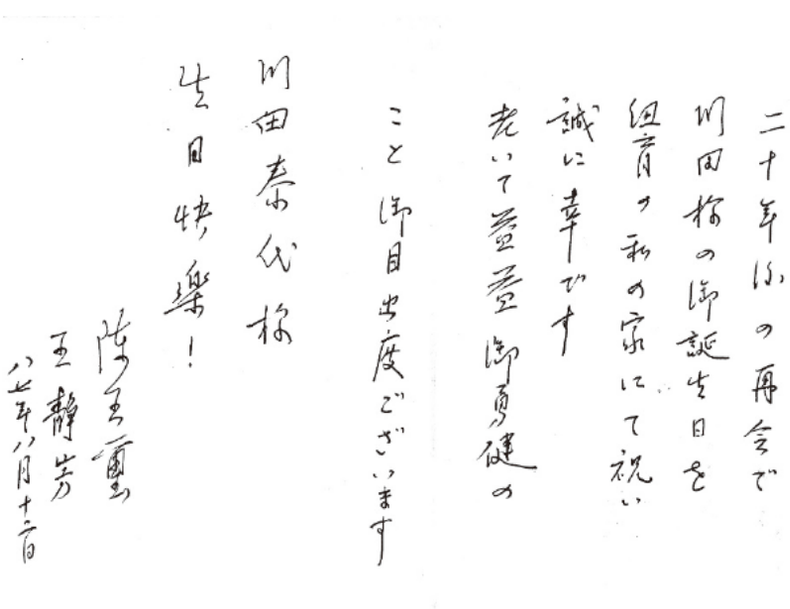
訪朝日本婦人代表団の参加者名簿。川田泰代は副団長（左側の上から３人目）＝1978年9-10月

■写真

川田泰代



陳玉璽からのバースディーカード（1987年8月12日）



陳玉璽

■写真

川田泰代（中央）＝1988年3月9日

■写真

民族衣装姿の川田泰代（左端）＝1987 年 12 月 1 日

河正雄コレクション　資料集　第２号

川田　泰代

2021 年 1 月 20 日　第 1 刷発行
2021 年 3 月 10 日　第 2 刷発行

発　　行　　河 正雄

https://www.ha-jw.com/
編　　集　　菊地 正志
印刷製本　　株式会社双信舎印刷

表紙写真：王翰の涼州詞（右）。陳玉璽と川田泰代

非売品

裏表紙写真：21 年目の来日を果たした陳玉璽と川田泰代（1988 年 7 月、成田空港）＝「長い坂」より